

第拾八號

文明之母第十八號目次

文明之母
日本人の西洋畵

論　說

文明の母とは何ぞや……法律學士　磯部四郎

家　政

生理經濟……醫學士　山極勝三郎
結婚の栞……奇玉散人

文　藝

雪……福羽美靜
早鶯○霞中歸雁……町原燕鷹
楠正行母……黑田淸綱
爽齊……八田知起
高尾……文學博士　中村正直
秋之夜酒漫筆……醫學士　銚酒風流士著　鐵筆將軍評

小　說

吉野川……鳴立庵主人
紫陽花……柳浪子

批　評

內外百事便覽……龍溪居士　矢野文雄
新刊雜書

錄

木村長門守の妻其夫よ送る書○一休和尙の母一休に贈る書○しみの詞○餘興○懸賞考物
彙報　數十件
寄　書
初春探梅（樋口貞橘）、春風、春初殘雪（琴水女史）古歌雨中之吟（琴水女史）

本誌ハ毎月二回三日十八日に發行す
本誌ハ前金に非れば發送せず
本誌の定價は一册金六錢十二册半年分金六十八錢廿四册一年分金一圓卅錢全國
無遞送料
本誌の廣告料は「五號活字廿三字詰」當り左の如し

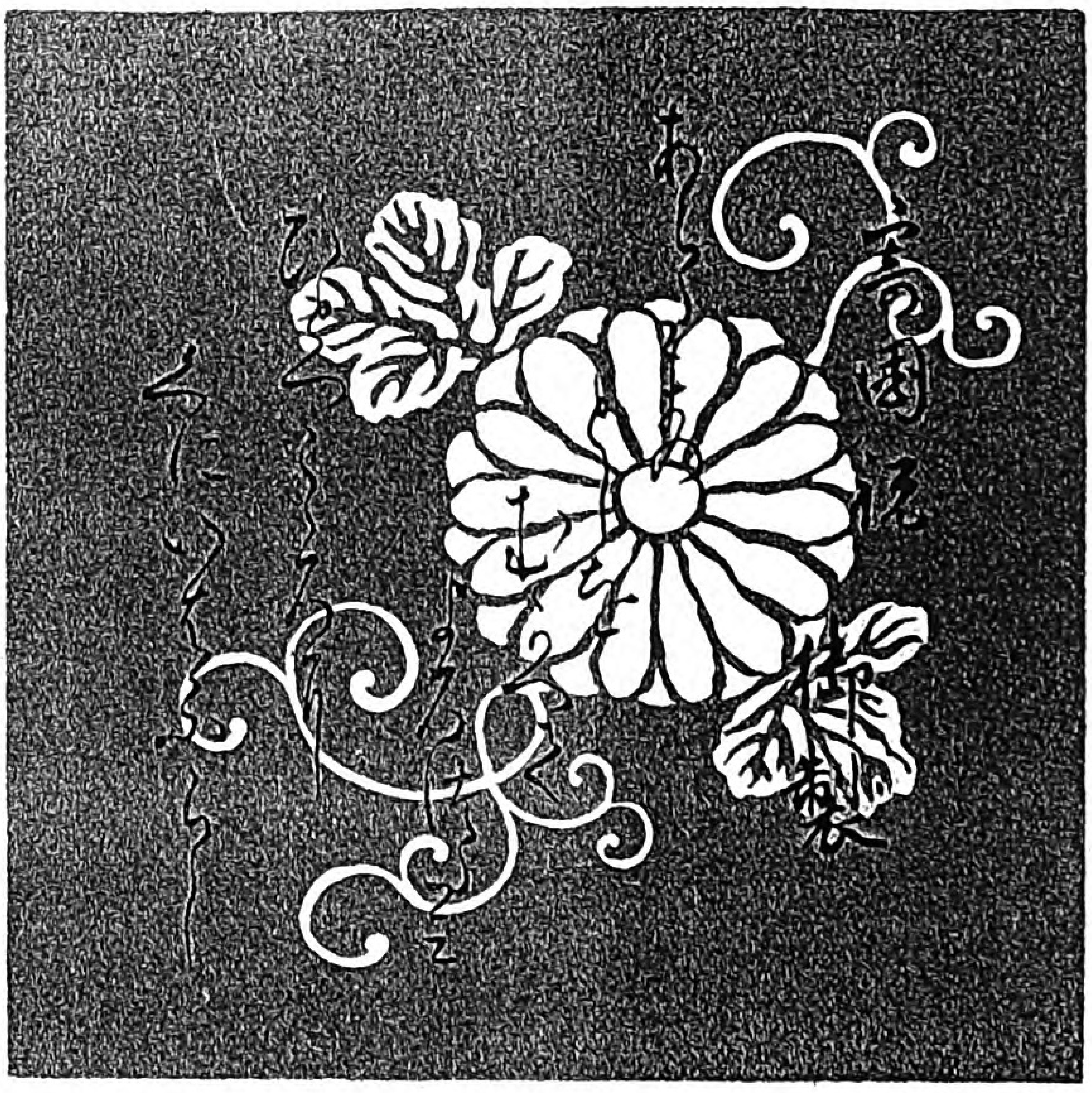
壹行	（壹回）金八錢	（二回以上）金七錢
三十行以上	金七錢	金六錢
六十行以上	金六錢	金五錢

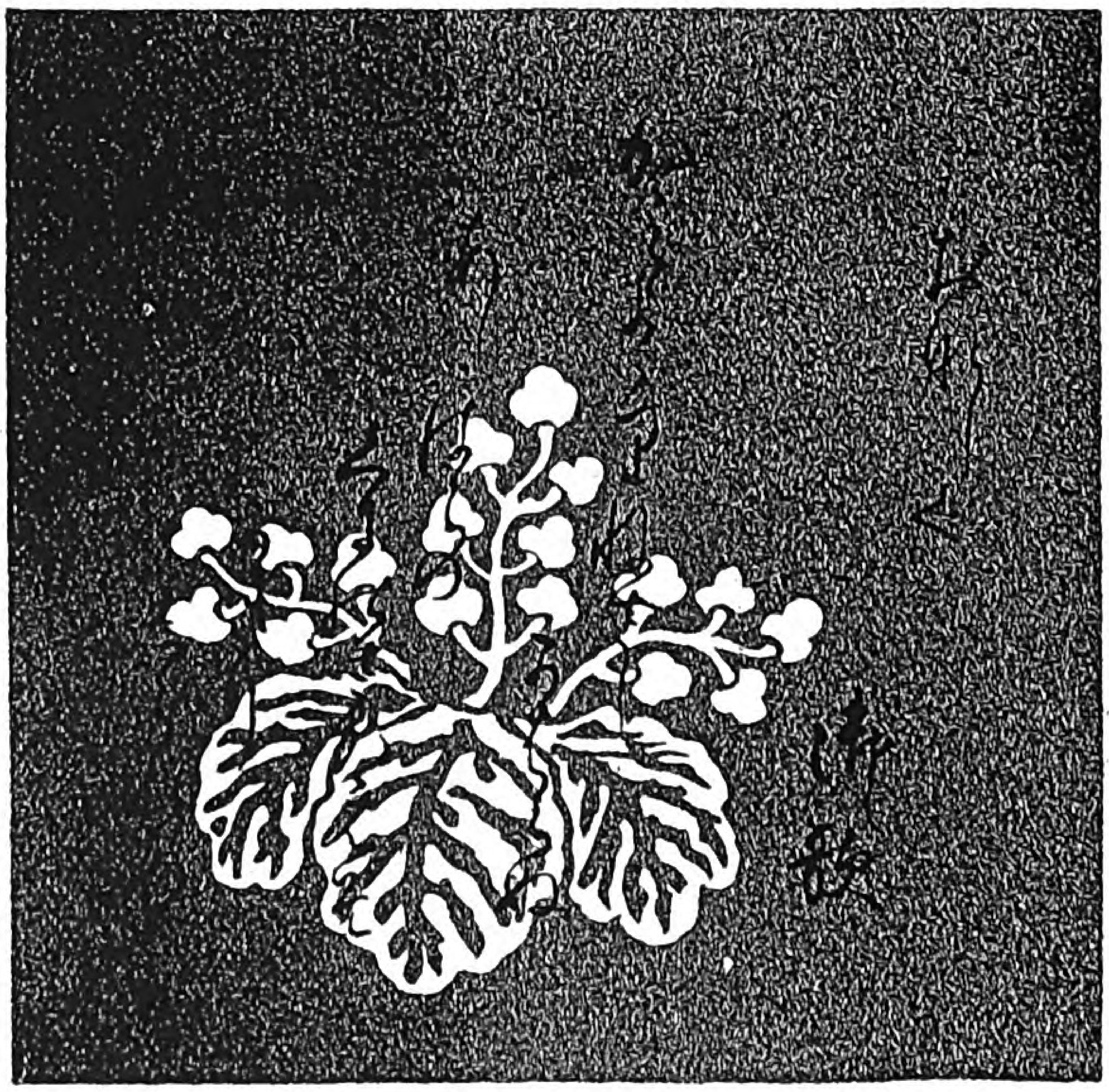
本誌の見本は郵劵六錢を送らるれば呈す
本誌代金御回送の節ハ內國通運早達便又は東京郵便局へ御振込被下度
郵劵代用は一割增
本誌の前金將に相切れんとする時ハ其卷の宿所姓名を朱書して發送すべし

主筆　大矢森之助
發行兼編輯人　中村一
東京深川區諸町十三番地
印刷人　小西石造
東京深川區仲町八番地

版權所有

發行所　東京日本橋區大傳馬町二丁目貳拾貳番地　生文社





文明之母第十八號



明治二十三年二月三日發兌

○日本人の西洋畫

大聲して西洋畫を罵るものあり、曰く何ぞ其の風韻に乏しきや、何ぞ其の雅致を缺けるや、其の山水の圖を見るに小兒の戯器たる箱庭に摸せるものゝ如し、其の花鳥人物の畫と見るに神品なき寫眞に擬せるものに似たり、其の綺麗なるものは實に浮世畫の摸倣たるに過ぎざるなり、其の疎雜なるものは唯五彩を亂點するの色紙たるのみなりと。嗚呼是れ骨董廛頭に曝さるゝ素人油畫をのみ觀たるものゝ言のみ、理髮肆裡に掲げらるゝ粗末なる石版畫をのみ觀たるものゝ言のみ、素より公論にあらざるなり。又疾呼して日本畫を嘲るものあり、曰く斯くても尚骨力ありといふか、氣韻ありといふか、其の山は實に薯蕷を疊ねたるが如し、其の川は眞に素麵を延ばしたるに似たり、其の人物鳥

獸は必ず不具、其の家屋器什は必ず傷物なり、蓋し其の畫工なるものは毫も配合の如何を知らず、畫法の原理を知らざる者なるべしと。嗚呼、是れ亦唯、牛肉屋料理店の壁上に掛けられたる素人畫師の作りし畫幅とのみ観たるもの丶論のみ、決して公論にあらざるなり。

それ畫は畫なり、畫の目的も畫を作る目的も皆一ならざるべからず、唯其の種類に區別あるべきのみ。西洋畫焉ぞ一概に俗と罵るを得ん、日本畫亦焉んぞ一括して醜と嘲るを得ん。日本畫にも實に秀逸あるなり、西洋畫にも亦實に秀逸あるなり、其れ既に互に秀逸あり、故にまた互に俗なるものあるなり、醜なるものあるなり、其の唯俗なるもの醜なるもの丶みと観て直に日本畫は拙し、西洋畫は劣れりと論定す、豈に偏見といはざる可けんや。吾人は實に日本畫西洋畫兩者の優劣を論ずるの極めて難きを知る、否決して輒く論定しがたきを知る、今又茲に聊か説くあらんとするものも其の兩者の優劣にあらずして單に日本人が作れる西洋畫に就きて所見を述べんとするに過ぎざるなり

何故に日本人が作れる西洋畫に就きて観察を下し筆鋒を試むるの必要あるか。曰く其の畫は餘りに拙劣なればなり、餘りに俗醜なればなり。彼の日本人の手に成りた

る小西湖畔の觀馬臺上に掛け聯ねたる油畫は如何。吾人は或は其の日本現時の西洋畫を代表するものなるべきを信ずるなり。而して其の中一圖の稱道するに足るものありしかを知らず、一紙の能く目を寓するに足るものありしかを認めず、浩歎の餘り熟々思ふ、其の斯くの如く拙劣に、斯くの如くに俗醜なるもの、蓋し其の原因なくんばあらず、而して其の原因も決して尠少ならざるべしと雖、其の畫工たるものゝ、熱心を缺けると希望の小なるとは必らず其の最大原因なるべしと。

我邦の西洋畫師、其の技を修むる實に不熱心なり、それ不熱心なり、故に勉強せず、辛苦せず。嗚呼何事にまれ、熱心ならず、勉強せず、辛苦せずして古來其の功を奏せしものあるなし。記憶せよ拿破崙は決して夢中に帝王とならざるを、華盛頓は素より歩まずして名譽の峰頭に飛び去らざると、彼のシーザル、彼のアレキサンダー、彼のニートン、彼のミルトン等皆また然らざるなきを。實にミッケル、アンゼロは解剖學を研究する三回に及びしといふにあらずや、吾人が生命を托する醫師よりも精細なる研究を爲せしといふに非ずや、チヽアンが「ピートロマルチン」の畫を作る八年を費し、ラスト、サッパア」を作るには七年を費せしといふにあらずや、ベルリールは盲者の手引となりて羅馬に遊び、漸く其の志を遂げたりといふに非ずや。彼れ我邦の西洋畫師たるもの、果して斯く

四

の如きの熱心あるか、斯くの如きの熱心なるものあるか。少しく其の技の進むに及べば、或は漫然俗醜極れる石版畫を作りて目前の小利を營み、或ハ傲然田舎漢の肖像を作りて黄金を貪り、而して俗人の賞讃を得るを之求め、識者の批難を蒙るを之恐る、其の作る所の畫の萎靡浸溺靡曼纖麗俗醜厭ふべく、拙陋見るに堪へざるまた怪しむに足らざるなり。

熱心と共に、美術家に要するものは期望なり——大なる期望なり 寄語す、西洋畫と爲すものよ、卿等の期望は大ならざるべからず、未曾有の畫を作し、未曾有の畫工たらんずるの大なる期望を懷かざるべからず。吾人は聞く我が邦の西洋畫工は期望如何にも小にして徒に西洋雜誌中の挿畫などの美なるものを取りて、其の摸本とし其の師とし、勿論立派なる師立派なる摸本に乏しかるべけれども汲々として之を學び、兀々として之に擬し、唯其の似ざらんことを之恐ると。試に思へ夫れ10に摸せんとするものは、到底10の下にあらざるべからず、9に擬せんとする者は、また必らず9に駕するを得ざるなり。 ジウクシス何のその、ジヨツト何のその、ラフアエル何のその、ベンヴエスト何のその、チシアン、ヴエラスケー、ルウベンス、ミユルリロ何のその、といふ位の大期望を有せずして、區々たる妖光を覆ひ、屑々たる小技を弄し俗人の賞讃を博せんとし小供だまし

の賞牌など得んと欲するもの焉んぞ其の上進を望まんや爪繪に少しく優るあるものゝみ顯はるゝ決して怪むに足らざるなり。終りに臨んで尚一言せざる可からざるものあり其は俗人の賞讃を忌むべきの一事なり、西人の美術家論に曰く蓋し美術の培養を毒する者濫りに賞讃の辭を賣るより甚しきはなし、彼のドナテルロは嘗てパヅアの地を去りたり、是れパヅアの人は氏の美術を賞賛することゝ天より高きも眞に其の巧拙を知る者に非りし故なり。彼れは寧ろフロレンツに歸らんと決心したり、是れフロレンツ人は其の舌鋒極めて鋭きも眞に鑑識の明ありて、氏が美術を賞賛することパヅア人の如く甚しからず、金と與ふることもパッナ人の如く多からず、批評嚴酷なれば我の我たるを忘れ知らず識らず高慢となるの危險に陷らざるべく、實に我をして美術家たらしむる所の一物を失はざるべしと思惟したるが故なり。然るに今の美術家は何事ぞ皆自ら名人を以て居り世人の諛言に眼光を盲せるは眞に浩歎の至りに堪えざるなりと。嗚呼明治の西洋畫家中ドナテルロの如き者あるなし而して社會の人亦みなパッナ人のみにして、フロレンツ人なし、悲しむべきかな。

五



○文明之母とは何ぞや

日本法朗西法律學士　礒部四郎稿

唯か盆梅の臘前に蕾を破り、氷姿妍然積雪に圍繞せらるゝを知らざるもの、如く、馥郁として香を吐き早く春信を通ずるを覩て、愛玩せざるものあらんや。矧んや冷艶雪を欺き、清操粛然として點塵に染まざるに於いてをや。又唯か果實の秋園に豊熟し、黄顆壘然貫珠の點綴たるが如く、收穫充分香味の甞むべきを覩て、食指を動かさざる者あらんや。矧んや巨大掬に盈ち、美味酣然として饗盤に上ぼすべきに於いてをや。吾人は斯の盆梅を愛し斯の秋果を嗜むと雖も、若し其の培養を怠るあらば、梅にしては唯に春に魁して香を吐かしむる能はざるのみならず、將に綻びんとする蕾唇も寒氣の爲に封せられ、風雪の爲に凋むや言を待たざるなり。故に盆梅を養ふものは風雪に先ッて早く已に窖を設け、其の培養を怠るべからず。又果にしては其の花を着けざるの初め早く已に肥料を與へ、花落ち實を結ぶに至るまで暫くも其の培養を怠るあらば、亦其の

豊熟を期すべからず。嗚呼、盆梅をして能く臘前に蕾を破り香を吐かしむるものは、其の母たる栽種戸の培養あるに依りてなり、果實にして能く秋園に珠を綴り黄を連ねしむるものは、亦其の母たる農業者の培養あるを以てなり。若し夫れ盆梅にして栽種戸の培養を怠り、果實にして農業者の汗勞を欠くあらば、豈其の好結果を望まんや。唯其の母たる栽種戸と農業者ありて、而して後盆梅の花を着け秋園の果を収むべしと雖も、培養の熟練と不熟練とに因り、其の結果に優劣あるは亦是れ免るべからざるの數なりとす。故に盆梅をして十分の花を着けしめ、果實をして豊熟の秋あらしめんとせば、先づ其の母たる栽種戸と農業者とを撰ばざる可からざるなり。若し之が母たるの伎倆なきものをして培養の任に當らしめば、到底滿足の結果を得べからざるは、經驗を待ッて後知るべきにあらざるなり

請ふ春よ無情の樹木と雖も、其の母たるものをして培養を怠り、若しくは母たるの伎倆なきものをして培養の任に當らしめば到底滿足の結果を望むべきにあらず。矧んや兒子の敎育をや。未だ外物の爲め侵害せられざる兒子の資性にして不善なるものは蓋し之なしと雖も、若し其敎育を怠り自然の成長に放任し、若しくは其の敎育を怠らざるも不善の慣習に感染せしむるあらば、亦是れ盆梅を風雪の中に放棄し、果樹を荒瘠

の土に栽ゆるが如く、不良の結果を避けんと欲すと雖も豈其れ得べけんや。故に兒子の良性をして益々善良ならしめ、隨ッて又天賦の智識を發育せしめんとせば、先其の母たるものをして幼より之を敎育せしむること、亦猶栽種戶の盆梅に於ける農業者の果樹に於けるが如くならしめざるべからず。然れども其敎育をして最も善良にして最も周到なること、靴を脫して痒を爬くが如きあらしめんとせば、先其の母をして敎育の重任に堪へしむるの方法を議せざるべからず。蓋し是れ此の文明之母の發刊ある所以なりと信ずるなり。

眼を轉じて泰西の敎育を觀るに、學校の設け全洲に洽く寒村僻落と雖も咿唔琅々の聲を聞かざるなきは、亦猶鷄鳴狗吠の相連るが如きありと雖も、人智の發達をして今日の如く驚くべき長足の進步をなさしめ能く其の文明をして全世界に冠たらしむるに至るものは學校の力固より與ッて大なりと雖も、寧ろ人母たる者皆能く其の責任に堪へ、家庭の敎育をして周到ならしめたるの結果なりといはざるべからず。故に女子の敎育に至ッては自ら其の目的を異にするものあり。他なし智識を涵養して十分の發達を致さしめんとするは、男子の敎育に異なる所なしと雖も、其の目的は之を戶外に活用せしむるにあらずして、專ら人の母たるに及んで其の子を敎育せしめ、善良なる兒子

を出だしめんとするにあり。是れ泰西の人智をして能れ長足の進歩をなさしめ、竟に文明の光輝を世界に赫々たらしめたる所以なり。嗚呼、人母たる者の責任重大にして其効果も亦偉大なりと云はざる可からず。

退いて我邦の人母たる者の有様と観るに、封建時代に在りては女子は唯順從なるを以て足れりとし、嘗て學識の必要を感ぜざるが如き風習ありき。是れを以て偶々天賦の賢性を有する者は其の子の敎育に注意を加へたりと雖も、概して之を論ずれば人母たるの資力なき者をして其子を養育せしめたりと云はざるべからず。否兒子の敎育は母の責任に屬することを解する者僅かに有りて絕へて無かりしと云ふも誣言ならざるべし。是れ我人智萎靡して進まず、井蛙管見に安んじて可憐の生活をなしたる所以なりと雖も、亦是れ時世の然らしむる所にして、獨り其の責めを母たる者に歸せしむべからざるなり。今や時勢豹變外交愈々開け、外文を輸入し以て我文明を幇助するに至ッては、唯に智識の發達を誘掖せざるべからざるのみならず、先づ母たる可き女子を敎育し、賢婦淑女をして我婦女社會に充たしめざるべからず。然りと雖も余は今日の女子敎育に對し、未だ滿足を表すること能はざるなり。必ずや進んで幾多の改良を加へざるべからざるは勿論、まづ其の風習と改良せざる可からざるなり。看よ今日女兒の

風習を看よ、普通の教育を受け少しく學識を有する者は、忽ち驕慢の心を發し都言の謂はゆる生意氣然たる弊風を脱する者幾んど希れなり。若し夫れ此の弊風を洗除するの期なしとせば其の女子漸く長じて母たるに及び、善く其の子の教育をなし得べしと爲すか。恐らくは其の能はざるを憂ふるなり。故に循々として文明の母たるべき女子を誘導し、之をして淑良の風教に遷らしむるは余が最も熱望する所なり。惟ふに本誌發刊の目的も亦此の點に在るべきを以て本誌をして益々盛大に趣かしむると同時に、文明の母たるべき女子をして泰西女子に愧づる所なからしめ、否一層之に凌駕する所あらしむるは、我邦の爲め敢て冀望する所なり。



○生理經濟(承前)

醫學士　山極勝三郎

さて又食物の入り口は鼻と口で、鼻からは空氣(是れ亦食物です)、口からは固形で流態

の食物が通じます。[illegible]れから食物が體の内で用を達して體を謝し去るの門はと申しますと、それは鼻(肺より)尿道(腎臓より)および皮膚でありまして、肛門から出ますものは殆んど用を達さぬ前か、或は用を為さぬもので、用を達して出るものは僅少です。けれども裏門否出口の内に数へても差支はありません。故に

入口は　鼻と口、

出口は　鼻、尿道、及び肛門(非常の出入口はぶきて)

であります。然しながら是れは外園の出口入口で、口から肛門へ素通りをして、本丸へ入らぬ、即ち腸胃の壁より血液に達し、全身賄本部なる心臓へ到らぬものがありますが、此の素通り客、否此の消化吸收を經ず、肛門よりして體内を辭し去る食物は、なる丈喰べぬ方が懐に取りても、亦體に取りても經濟です。牛肉は成程滋養物ではありますけれども、一概に滋養物の食ひためなどは私なども覺えがありますから申すのですが、體の爲になりません。何故と申しますと、人間の體は例の經濟向に出來て居て、又意地が奇麗ですから、必用丈より外のものはずんずん出して仕まひます。して又さうする様に腸胃に命令が兼ねて布いてありますから、腸胃は餘計な作用は厭やがります、一度や二度は我慢も仕ますけれども續きますと承知しません、所勞と出ます。斯く申しますと

何やら大層腸胃の辨護をいたす樣ですけれど……………命を何とも思はんで、生きる爲に食らふと云ふことを忘れて、食らふ爲に生きて居ると云ふ樣な暴飲暴食家が多くて困りますから、何卒貴公より何とか暴飲暴食家の蒙を啓いて給はれとも、何とも賴まれた譯でもありませんが、……貴公の召し上がりものは分けて能く消化吸收致しますとの賄を受けたる覺ねもありませんが、……謹まんではなりません。そこで眞の入口は腸胃の壁と肺とで、眞の出口は肺と腎臟と皮膚とであります。

食物が消化されて胃腸の壁から吸收され、水脈管と云ふを經て靜脈と云ッて手足などへも見ゆる青筋の內にある靜脈血、俗に黑血と合し、心臟へ達し肺臟に於いて赤き血となり、(酸素を得て)再度心臟へ還り、夫れより心臟ポンプ作用により、全身の各部へ派遣さるゝに到るまでの道行經濟的の仕掛は、なか〳〵長ふありますから、今晩は唯食物、殊に米飯麥飯等を食するにも注意す可き生理經濟を御話して止めにしましやう。或る西洋人は惡る口を言ひました、

日本人が飯を食ふさまは、さながら飲むが如くだ、と、

之は日本の人が茶漬で喰べる處など見て申したのでしやうが、全体日本人は能く咀嚼して喰べませんからのことです。齒と云ふもの唾液と云ふものは、言語の際必要なる

ばかりでなく、歯は食物と噛み碎き、其の細粉となりたる食物の内へ唾液が追々浸み込み、亦之を包んで嚥下に便利よろしき樣にしてありますが、嚥下の便のみとならば茶漬の代用も決して苦しくはありません、所が此の唾液です、これがなか〳〵利き役者で、口吻を滑にし舌の運動を自在ならしめ、嚥下を容易にし或は狐狸などに馬鹿されぬ爲の役にも達つさうです。が、まだ〳〵あります、化學的作用です、即ち米麥其の他植物性食物中の含水炭素、或は澱粉と稱する(葛粉等のごとき)者を糖分とする力があります。一体植物性食物中に於いて主成分なる澱粉は、此の糖分となりてこそ能く吸收さるゝのです、其の爲に唾液があるのです。それだから此の唾液の職分を盡させんと云ふは歯で充分噛みくだいて、唾液が此の澱粉へ働らく樣にしなければなりません。此の澱粉は皆澱粉粒となりて、木纖維といふ俗に所謂「すぢ」と同じ性質(筍、竿等の「すぢ」)を持ッて居ります膜に包まれて居ますから、之を歯で嚙み破ッて此の堅砦を乘取りて澱粉粒を降參せしめなければ、唾液の職分は未だ盡せりとは云はれません。尚一歩を進めて申しますと、日本人が食物の主成分として仰ぐ所の米飯(他は皆之を菜と稱す)は最も多く澱粉を含んで居ます。此の澱粉の消化さるゝは唾液及び腸に於ける膵液の力でありまして胃は少しも之を消化しません。ですから今米飯を喫するに唾液を用ゐざるときは、

消化力の半分を減じたるも同樣で實に馬鹿氣た解です。諸君こうこに茶漬けれ思ひ止まりたまへ、生理經濟の本意に非ず。

今晩はこれで止めます。終に臨んで一言を呈す、當時の如き困難の世の中に立ッて其の伎倆を顯はし見んとするにも、郷國に盡くさんとするにも健全なる身体を有せざるべからず、宜しく生理經濟を守り、各々其の專業に從事せられんことを切望いたします。

（完）

○結婚の栞（承前）

奇玉散人

第二、近緣ならざるもの

私は近緣結婚の惡いと云ふ事を陳ぶるには主に去年の五月頃築地盲啞學校の小西君が調べられた結果によります。氏の調べに據りますと此盲啞學校の中で盲生二十七名の中、生來の者が三名、又啞生四十三名の中、生來のものが二十二名ありました。して右三名の盲生の父は何れも大酒家ですが、殊に其中二名の親は從兄弟同士の結婚者です。又右二十二名の啞生の中、十五名の父は大酒家で、殘る九名の親は從兄弟再從兄弟の結婚者でありました。此外驚風で啞となつた者が十名ありましたが、其中二三名

の親は從兄弟同士の結婚です。斯樣に僅か三十五名の盲啞者の中に、近緣結婚をした親が幾んど半數もあらふとは、實に偶事とは思はれません。

此外に「ファルク」氏の調べた一つの事實があります、或る一夫婦あり共に壯健な男女ですが、此夫婦は祖父母以來三代の間、從兄弟同士の結婚者です、さて此夫婦に六人の兒がありました。此六人の兒、無殘にも皆聾啞です

又「ヂーベー」氏の調べた事實によるに、非常に壯健なる夫婦あり、共もに從兄弟同士であります、此夫婦に八人の子あり、内四人は聾啞です。又一人は五歲のとき病死しました、殘る二人の子供、是も後に石聾と成り果てました。

此外斯樣な恐るべき例がまだ澤山ありますが、爰には最早記しませぬ。兎に角近親結婚は惡いに相違ない、夫故造物者は草木などにも近緣結婚の出來ぬ樣にしてあります。御承知の通り草木の花には中央に一本の太とい雌蘂が有て、其周圍に五六本以上の雄蘂があります。偖此雌と雄とが其儘結婚して宜しいものならば、至極便利です、坐ながらちよいと手を出せば直に間に合ます。が、夫では肝心の種子が出來ない、是非共蜂や蝶などの媒介を賴んで、外の花と結婚せねばなりませぬ。夫故造物者は至極良い鹽梅に組織んで置きます、即ち一つ花の中では雌と雄とは同時には成熟しませぬ、何ち

十五

か一方が早く熟して、最早結婚の濟んだ後に一方が又熟します。此外にも未だ樣々なる仕掛がアッて、假令雌と雄とが同時に熟しても、一つ花の中では結婚の出來ぬ樣な工合になッております。植物の數は日本產のもの許でも四千種以上もありませう。が、斯其中で一つ花の中で結婚するものは「アフヒスミレ」など云ふ二三の植物に限ります。樣な譯からして先年農學家の津田氏はなんでも人工で稻の花の結婚を媒介したならば、收穫が多いに相違ないと考へまして、彼の津田繩なるものを造ッて稻穗の上を引かせました。が、何故か思ふ程の結果がなかッたは殘念でした。

日本では昔から兎角近緣結婚が行れます、是も便利がないでもない、親類中なれば身元も能く知れて居るし、當人の氣性も分て居るし、夫のみならず折角心勞して作ッた財產を、あかの他人に讓るよりは親類の者に讓りたいは當然の事、殊に親類なれば何かにつけて掛引がし易すい、從て當人は勿論兩親も安心です。然し前に述た樣な弊害があると知ては、中々少しの便利には替へられませぬ。

第三、道德完全なるもの。

道德は人間に取て最も大切なものです、之なければ世は獸類の巢窟と一般です。偖道德と云ても甚だ廣い、廣いのみならず其區域は不定のものです。然し私は爰では人

の妻たるべきものに最も必用なる德を陳べませう。最も必要なる德、夫れは私の考では先貞操と愛情の二ッであらうと思ひます。妻の不貞操程不都合な者はありません。さればにや文明國では東西共に之を以て法律上の罪人としてあります。尤も不貞操と云ふ事は至て秘密なもので、從て發見し難い事ですから、刑法上から罰する事は出來ません。が、妻の不貞操を認めて離婚を請求する夫があれば、之を許さぬ文明國はありませぬ。私の考では一体不貞操と云ふ事は畢竟敎育の無いところから起るのです、即ち結果を心配する程の智慧のないものに起ります。夫故昔の野蠻人即ち原人の時代には、不貞操の多かッた事は社會學を見れば明です。唯今でも左樣です、彼の南亞米利加の巴西地方では一人の男が數人の妻を蓄へ置て、賓客の見へた時は其妻と差出して假りの情けを分たしむるのを最上の待遇とするとの事です。此外文明國と呼ばるゝ國でも、上流社會には先罕ですが、下流社會にはありがちの事、彼の都新聞や、やまと新聞などを見ると、斬ッた張ッたの血塗れ騷動が毎日の樣に見へます。成程了見の淺墓な者には密夫狂へなどは面白いでせう、面白い譯です、好た同志の男女が勝手な戯れをするのですから、是が面白くない人は決して無い筈、私は是が、却て人間の本性だらうと思ひます。が、此本性を矯むるが敎育です、なぜ敎育は之を矯めねばなりますまいか、そ

は陳ぶる迄もない、第一に家の系圖が亂れます、第二に夫に盡すべき情けが薄らいでくる、是はもう薄らがねでは叶はぬ事、我意中の人は外にあるのですもの、丁度間夫のある花魁が他し男に情けを假すのと同樣です、情けは賣れど心まで售られないのは至當です。偖既に情け無い女、是程つまらぬ者はありませぬ。其上左樣な身持の女は家事に心が這入りませぬ。ツマリは家に風波が起ッて、離婚の本となるは必定です。斯かる忌まはしき結果になりますから、國律も社會律も共に之を禁じてれきます。然るに其禁と破つて鎖細な樂を貪らんとする獸心、偖愚かもの程忌まはしき者はありませぬ。

是から私も愛情につきて陳べませう、女に取て愛情ほど大切なるものはありませぬ、愛情さへ厚ければ夫之對して不貞操もない筈です、又飽きらるゝ事もない、必ず夫の爲めに愛せらるゝに相違ありませぬ。さて此愛情とは如何なる事を申すのですか、是も少しく解釋せねばなりますまい。人に妻たる婦人の愛は、娼妓や藝妓や揚弓店の姉さんの愛とれ聊さか相違しております。約めて申せば誠と云ふ事がなければならぬ、誠のない親切又誠のない愛敬、之は藝妓や娼妓の社會に能く行はるゝ者ですが、之では充分に人をして感謝せしむる事は出來ませぬ。妻は是等の社會の如くに只酒と呑ませ肴を喰せ、笑つて見せたり跳つて見せたり媚びたり、諂ふたりした計りでは濟みますまい。

然らば眞の愛情を盡す者は如何なる者かと申しますれば、左の條件に適ふた人です。是は英吉利百科全書の中にドクトル・アキサンダー氏が說て置かれた事であります。

第一、夫婦は互に愛し合はねばなりません。

第二、夫婦の間の約束は言にも行にも能く守らねばなりません。

第三、夫婦はお互の安寧と名譽と快樂とを進むる事にこゝろせねばなりません。

第四、夫婦はお互に扶け合ひ、憂きも悲きも倶にして、一人に屆かぬ所あれば能くこゝろして補はねばなりません。

第五、夫婦は互に信任せねばなりません、互の間に私事や隱事があッてはなりませぬ。

此外妻たるものは別けて其夫に從順でなければなりません。尤も從順といふて理にまれ非にまれ、夫の言ふがまゝに奴隷の如くに從へと云ふではありません。が、妻は是非共夫の保護を受ねばならぬもの、又何事につけ夫を先導とせねばならぬものです。夫故に妻は之に附き從ふが當然、それを强ちに男女同權などいふて、夫が女郎買をすれば妻も役者狂をすると云ふ樣では、偖家內の圓滑も望まれません。

此外又子を育つるには愛情深き母でなければならぬ、勿論世の中に子を愛せぬ母は

ありません。が愛するにも段々階級がある、妄りに姑息の愛に流れて放任主義に育つる母、或ゐは強ちに嚴重にして其子をいぢけしむる母、さては緩急宜しきを得て、教養節に當るの賢母…此等を比較したならば如何でせう。子は皆親の性質を見倣らうものです、愛情の乏しい父母から愛情の深い子は出來ませぬ、又優さしい父母から邪慳な子も先づ出來ることは罕です。

（未完）



○雪　　福羽美靜

めづらしと、みわたされけり、しら雪は、ふりぬといへど、新らしくして。

○早鶯　　町原熈麿

よりて見よ、しづがおたまき、いと早も、くるか園生の、うぐひすのこゑ。

○霞中歸鴈　　仝

むれて行く、影はかすかに、且消えて、こゑばかりこそ、かへるなりけれ。

○楠正行母　　黒田清綱

よしのやま、わかきの花を、おほひつる、はゝそのかげの、高くもある哉。

○夷齊　　八田知起

山ふかく、折りしはらびは、よろづ代の、道のしをりと、成りにけるかな。

○高尾　　中村正直

三叉流血蓋謬傳、石井高尾事最眞、琵琶湖上勝絕地、偃武後產一才人。
姓石井名吉兵衛、詩歌管絃皆善會、藩公直孝愛ニ其才一、恩寵優渥躐等輩。
陪駕一年僑ニ東都一、偶遊ニ北里一買ニ名妹一、三浦屋初代高尾、才情容色絕世無。
佳人才子例相愛、一夕同レ枕契ニ千載一、由來得意易レ引レ魔、有レ人千金議ニ昏配一。
高尾驚駭贈書函、欲下喚ニ石郎一子細談上、是日侯家和歌會、飛レ觴遞レ醆與正深。
石郎亦侍在ニ其席一、恨不三一身生ニ羽翮一、會散三更邸門閉、飲泣空侍晨鷄礫。
忽有ニ同僚傳ニ公命一、今日汝顏憂悄々、母ニ乃中懷有レ所レ思、不レ然汝或有ニ疾病一。
拜答否々無レ有レ玆、使者復命公尙疑、乃召ニ石郎一即時至、至即自迎ニ之階墀一。

手賜一枕添恩旨、愀舍不便養病體、今夜可持此宿他、君恩天大感謝退。
飛戀直向日本堤、更深漸達狹斜街、恠事咄々閔々然、高尾伏劒命如絲。
抱持連呼吾至矣、佳人睜眼攬郎袂、一笑粲然息便絕、滿座愁慘暫掩涕。
傍有遺書語慇懃、永與郎君誓松筠、不意他人贖妾身、唯有同死完婚姻。
待至中夜郎不來、獨死庶使妾心知、郎幸不忘契濶說、九重泉路交期盡。
讀畢石郎腸寸斷、恩賜枕中黃金粲、難返香顏既死魂、空充棺材與僧飯。
夢寤悲傷病在床、瓜期已滿還故鄉、行至淡海華表驛、削髮爲僧入道場。
惟時石郎齡尙少、後來學成才德邵、深草元政師即是、禪餘詩文極絕妙。
噫嚱高尾慧眼善擇夫、氷清霜潔死不虛、果出高僧冠照代、爲作此詩砭頑愚。

○秋之夜迺漫筆(八)

鈍迺風流士

賣果の婦

拿破崙第一世が年十六七のころはひ薄林の兵學校にて物學びせしころとかや、ある賣果の婦ありて常に春秋の果實を鬻ぎけるが、拿破崙の果實を嗜むと聞き、兵學校に來りては鬻ぎける。拿時としては價を償へぬことありき。拿のち巴黎の兵學校に赴くと

き賣果の婦來り果ひと籠を贐として、風土もいたく異り侍れば國の爲め身をおしみたまひかしといふ。（鐵雍將軍曰、此語如有意如無意、妙亦在有意無意間。）拿は答ふらく、猶償はぬもの數金あるものと、他日にまかせたまひね、とて別れにけり。年月に關守なく拿は處々の戰に功績多く、はては將軍となりて諸國にいくさしてけるが後には皇帝の位に即きたまひぬ。今はむかし賣果の婦を憶ひ出で、薄林の都に御幸したまひ、黃昏微服に一人の侍從を從がへて婦を尋ねたまひにき。婦は二人の子と爐畔に粥すゝりてけるが、帝は果實ありやと問ひたまふ。婦は出でゝありと答ふ。帝は侍從とその兩三を喫したまへば、侍從は、これ女房尋ぬることあり、今日はわが帝のこゝに御幸したまふを知るべし知らずもがなにや、と問ふに婦は、まだ知りはべらず、憶ひ出だせば幾年月か帝なほ兵學を學びたまふとき、好みて妾が果實を取り寄せたまへにき、といへば侍從はほゝゑみながら、拿は直ちに其の價を償ひたまへしや聞かまほし、とたづねけるに婦は、もとより然なり、といひもをはらず帝は驟に起ちたまひ、朕こそは當年の拿破崙なれ、ひさしく逢はぬものから女房は朕を忘れしよな、朕はなどて女房を忘れんや、國の爲め身を惜しめと別るゝときのはなむけ今猶耳に殘れり、されば、こそ何處の戰にても身を愛したれ、思ふに過ぎにし薄林の日には數金を借りてありつるなり、こゝに利子とも〲千二百佛狼こゝろよく受

取りかねとて黄金をいだしたまへば媼の驚き一方ならず、見まがへ侍りゆるしたまへ、と跪きてしばし涙にかきくれぬ。　帝は去りたまふとき、ろが二人の子は宮中にて養育まむほどに、心おきなくわたすべしとて五六日を經て二人を招き寄せ其の女子を宮中にて教へ育てたまへり。　其の子は兵學をまなび、年長けて勳功を立て帝の仁愛に酬へたりとなむ。　面白の逸事ならずや。

鐵筆將軍曰、英雄逸事有二眞奇者一、是亦其一、然行文缺レ錬、拮屈可レ厭、顧非二吾兄得意之作一也。



鳴立庵主人曰ふ。　吉野川の彼方に見ゆる妹背山の卷には、山本靜と川村光子孃との目出度も婚儀整ひ、略式とはいへ島臺の上に鶴龜を遊ばせ、四海浪は靜に庭砂金銀を飾るの場をすませ、其れより光子が當分野畜の駒にて、心は嬉しさにはやれども、他人と見ては何となく耻ぢ畏るゝ様を叙せんとて、既に脱稿なしたる處へ、本

誌第十四號到着し、續いて第十五號を見るに、文庫に其の人ありと聞えたる漣山人君が、艶麗の筆もてかき流し玉へる、目出度花嫁御と題するを拜見し奉たり。主人が不熟練なる、且至り少なき、固より當時旭の勢ある漣君に匹敵し奉らんなんどの心構は、毫末これなき處なるが、不異議なるは其の想像の類似せる、例へば光子が新聞と讀む所、毛糸を編みつゝお豊に物言ふ所、又靜に外套を着する所、又場合は異なれども靜が妹に向ひて、以後お光のことを姉さんと云ふべく命ずる所等、彼此對照すれば、必竟主人がこの妹背山の卷は、漣君の花嫁御中、朝と晝との處々を叙述したるに過ぎず。故に其儘におく時は、花の甘きを吸ふ胡蝶の疑ひあるべく、且はおはけなくも、厚顔にも漣君に抗するてふ罪さへ免れぬべう覺れるからに、之を删除することゝはなしぬ。このこと云はでもの事ながら、前回宮島の詞によりて或はこの回には、婚姻の現狀を叙するならん、と推せられし讀者もおはしつらんか、とおもへる儘に、

○吉野川。

嶋立庵主人

第六、彼方に聳ゆる妹背山。

「見渡せば柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりける。」彼方にけぶる柳の緑りは、空の色

につゞき、此方にさける櫻の花ハ、彩霞をこめたり。今日を過ぐさば雪とぞ降りなましとて、人々の見に行く明日香山、集へる人の中にわが思ふ人はありやなしや、と舟急がする隅田川、花は上野に限ると下の人も云ひ、九段の櫻は八重とぞ云ふ。されば此頃のいそがしさ、人々の心も春になりて、年老ひたる人は梓の腰に杖を引き、幼き童男童女は父母兄姉の手にすがり、今日を晴れと着飾りたる乙女は、艶を花に競らべ、ステッキを手にせる少壯の男子は、花より外の花を見るに急がしく、深窓奥閨の美人は醉狂人を避くるに遑なし。千態萬狀、異樣百出凡そこの頃のけしき、至る所行く所、悉く皆春ならざるはなく、人は春の爲に忙はしく、春ハ人をして狂せしむ。

山本靜は母の喪に閉ぢこもり、悲哀涕哭に時間を送りしが、もとこれ兄妹両人の外にハ、家内は唯下婢一人あるのみ。故に親類緣者、知己朋友の勸めに從ひ、忌服中ながら、新婦を迎ふることを承諾し、盛式は忌服のはつるを待つことゝし、唯形ばかりの儀式を行ひて、彼の意中の人を同契の友となすに至りぬ。今日は日曜にて幸ひ天氣も朗らかなり、今の程を過ごさば都の春も見逃がさまし、留守居はこの母がとの勸めに從ひて、新夫婦はお豐を拉へ、今日わざ〳〵これが爲に來りし川村の母と殘して、家を立出で、辻車二臺を傭ひて、お豐と光子と相乘りなし、靜の車を先きに立てゝ、墨田堤を指して急がせぬ。

折しも午後の二時頃人の出盛りとはいへ、堤は一面に人の山を築き、東橋よりは車は通行すべうも見えず。「これは〳〵とはかり花の」といはんより、寧ろ「これは〳〵とばかり、人の隅田堤」と云はん方、却りて當日の實況を寫すに足りなん。靜は止むを得ず、東橋にて車を下り両人を顧みて、

「どうだ、この人は。お前方は己の後に付いて、向ふまで行くことが出來るか」。

両人はわなとばかり見とれしが、

妹「この大勢をかきわけて、迚も往けるもんですか……途中で兄様にはぐれるといけませんから、ねェ姉さん」。

姉「さうですねェ、この人ではとても……」。

靜「ろんなと云ッたッて仕樣がないぢやないか、船と頼むのは面倒だし、そんなら何處かへ寄ッて、お母さんのおみやげを買ッて、そうして歸るとしやうか。其の方が宜からう。それにした處が、これから東両國の方へはまだ遠いし、ハテ仕方がない、まァ寺内でも歩行て見やう、何處かしづかな處があるだらう」。

三人は足を踏み返して觀音の境内へとあゆみを進めたり。されど今日は何れの料理店も一方ならぬ混雜にて、松田は客留の札を掲げて、既に人の來るを待たず。萬梅は萬

の下足札を出して、常より客足ハ倍すといひ、三谷の八百善に行かんかこれも千人の客をや宿すらん。汁粉屋蕎麥屋には用なく、しやも屋牛肉店には入ることを耻ず。如何はせん。首を左右に傾け盡して、最後に思ひ出でたるが「この邊は何處へいッても迚も駄目だらう、それよりこれから上野の花を見て、何處かへ寄ッて、さうして歸るとしやう」と云ふにてぞありける。静は再び二臺の車を雇ひ、上野までと約して驅り立てたり。

上野に來れり、花候は隅田に比べなば、少しく盛を過ぎたれども、さりとて一陣の狂風吹き來りて、爲に落花狼籍といふまでならず。例人出の多きは隅田に劣らざる程なるべし。三人は摺鉢山を一周し、動物園に立ち入り、博物館の前より又摺鉢山の背に出で、元の道に立ち歸りしが、何處に往くも、何處を見るも、花下の人は皆狂する如く、赤裳蹴出し、手拭にて目を掩ふ二九の美人、尻打からげ、酒樽叩きて跳り廻たる白髮の老人、彼方の一團は西洋遊戯を演じ、此方の一群は唱歌を吟じ、人に揉まれ塵に染む。隅田堤よりも一際興あることゝ、三人は打悦びつゝ見霽らしの宜しき或る掛茶屋を擇び、折に適ひたる櫻餅と、花茶とにて暫時休息することゝなしたり。静はひとり彼方にたてる大木の櫻をながめつゝ、思出づる樣、

上野の櫻は多くは大木にして、且老松古柏の間に交り、風致幽雅、眞に賞すべきの價あり隅田の花は船よりこれを眺むるの觀ありと雖も、堤上雜沓、卑俗極れり。之を譬ふれば、彼は花街柳巷に色を賣るの藝娼妓に似て、これは貴家深窓に人となりにし美孃に似たり。さるを世人は何とて、彼に厚くして此に薄きぞ。世は樣々の物なりけり。

眼を轉じて今餘念なく櫻餅を味へる兩人を見れば、あな不思議、わが妻を賞むるならねど、光子は品格高尚にして、お豐は何となくけおされて、卑俗なり——光子は上野の花の如く、お豐は隅田の花に似たり。それにつけても彼の宮島は、如何なる所存あるにや、頻りにこのお豐を懇望することの切なることよ、何一ツ取處なきものを……轉々彼此の上を案ずる折しも、口に上さぬ心の噂も、いつしか影に現れて、摺鉢山を降り見ゆる一人は慥に宮島なりけり。お豐はいち早く之を見附けて、

「兄さん彼處に見ゑますのは、宮島さんじやーありませんか。」

光子も眸を凝らして、

「ホンニ宮島さんに相違ありませんことよ。」

宮島の漸く近づくを待ちて、此方が聲を掛くれば、彼方も之を見附け、顏見合せて

宮「イヤーこれ〳〵お揃で、お花見ですか。あれお豐さんも一處に。」

靜「今日は會々留守居があつたから、向島の花見に行ッた處、いやはや人ばかりで、動きが取れず、止を得ず何處かで一盃飮まうかと思ッたけれども、何處も、皆、客留めで、仕樣がないから轉じて此處へやつて來のさ。鳥渡好い處だ何處かで一盃やろう。」

宮「ハヽアさうか、僕も同じく向島へ向ッた處、人計りでぶしてほこりで不淨なくて仕樣がないから、言問團子の所から、直と歸ッて序に此處の櫻を見て、今戻ろうといふ所さ。好かろう、何處かで一盃やりませう、だが依然この近所にはありませんぞ。君には少し遠くなるが、車を急がして連雀町の今金まで行てはどうです。」

靜「しかたがない、君の便宜の爲に行きませう。」

宮「いやにすねますねヱ。」

四人は山を下りたり、宮島は二臺の車を僦ひ來りて、

宮「さア奥さん、あなたと旦那は、先の車ですよ、お豐さんさア此處へおいで、姉樣と兄樣とは仕方がないから、あなたと私と一處に乘りませう。」

萬世橋にかゝらんとする時、同じ花見の客にやあらん、千鳥足の三四人連は、先きなる車を見とめて、

「オイどうだ、あの相乘りは如何にも中のよさゝう……エヘン。」

宮島は之を聞きてお豊に向ひ、

「お豊さん今の言を聞きましたか。」

紫陽花　　柳浪子

下

今やつと雑巾がけ濟したと見えて、まだ中の水は泡立て居る雑巾桶の取手に絞り固めた雑巾を危なく掛け、水虫に喰はれた手を厭つて、日の一杯にあたッた南向の水口の羽目に身を寄せ掛けたる十五六の小娘、衣服から頭の飾り僅かに此下宿屋の下婢らしい。朝は新聞屋の鈴を竈の前に聞き、夜は一番鶏を聴てからも遅歸りの客に起されてオチ〳〵とは睡られぬ身の、暖とひ日晷に恍惚と睡氣つき、昨夜見た在所の夢、今又此に見直すか、外見には寐入ッたかとも思わるゝ無心の顔つき。尊卑貴賤、容色の妍醜は除て置て、人の美しいと云ふは恐らく此處らでがなあらう。

其處に足音優しく露路の溝板をたどッて來た山下のおむら。今洗湯からの歸宅がけか、遠見には七難も見事隱せる程の厚化粧に、翫弄物見る樣な二本の毛筋棒に兩鬢を支へさせたは、頸の鉛粉をいとつてらしい。勿論ヌキ衣紋にしたれど、繻子の掛襟鼠色

となり、双子の布子の裙、釣上りて皺になッたのは、綿南部の書生羽織の長いやつに隱して居る。そして吾妻下駄の臺と臺とが摺違ふ程態と內跨に步行いて首のこなしと釣合をとる、マサカ八文字を眞似るのでもあるまい。左りの手に手拭と七道具を一握にして右の手に一本二錢五厘ばかりの花簪を持つて居る。小女の無心な顏を見てフフッと小聲に笑つて、吾妻下駄に力を籠めて溝板を一蹈ふむのと共に、ワッと小女の肩に両手を掛くる。小女はオッと驚く。

オホヽヽヽヽヽ。

こんな時迄袖を口にあてたおむらの顏、小女は暫時ポンヤリと見詰て、……

はんたうに、吃驚したお家母さんがと思つて……。おむらさん、ひどひ事。

ホヽホヽ。勘忍おしよお霜どん、チ。その代りにこれを上るから。

持つて來た花簪を霜に渡す。何を貰つても嬉しい年頃、殊にこれ程の物まで自由にはならぬ身の嬉しさ顏に見はして、簪とおむらの顏を見比べて餘念はなひ。

マア、挿て御覽よ……。オー能く似合つたわ。今度は何か好い櫛を……花櫛か何かおまへの好な物と買つてあげるよ。

花櫛……いゝえ入ません、昨夜も半襟を……そんなに戴くとお神さんに叱られます。

いひよ。叱られる事はないよ。叱られたら私から貰つたといや叱られやしないよ。
お前は眞實に可愛もの、昨夜だつて……昨夜の歌加留多だつて、お前が呼に來てお呉
だから、やつと……眞に面白かつたよ。
皆さんもさう云て入らッしやいますよ。おむらさんは面白いッて。
ね、誰が何人が、私が居たから面白いッて。
あんな面白い娘は少ないッて、新田さんが。
ね、眞實に。新田さんてェな、あの私を呼びによこして下すつたお方なの。
ねヽ。
さう。あの方も好い方ね。あんなキサクな方は氣がおけなくッて好いわ。お前は
どの方が一番好なの、ねお霜どん。
私……私にはわかりませんよ。そんな事は。
まあさ、どの方が一番優しいと思ふよ。
さうで御在ますね……。優しい方なら武田さんが一番優しう御在ませうよ、内の御
神さん迄あの方の事ハ賞て御出なさいますから。
おむらハ近所の湯屋を二ッ越して、此家の先の湯屋に日に二度づヽの奉公するのも、

三十三

廻り道して此露路を出入するのも、高が他家の奉公人の心を取るに氣を揉むのも、打明た處、此武田と云ふ書生に親しみたいばかり。六ッ七ッの頃から男の子と遊びたがり「まゝ事」にも我から女房の所作心得顔に振舞ひ、おむらさんは○さんとをかしいなぞと云はるゝを嬉しがりて、十二三の頃となりては辻待の車夫に嬲らるゝを面白く普通の小娘ならまたと其角通行り得まいに、却つて此方からそゝりに行く。清元よりは新内の方がまた一段婀娜ッぽいと、蝙蝠傘を三味線の棹にして、明烏の文句を口癖にうなりあるく。人の評判する程我容色わるいと思はねば、男好の心に比較べて、道に會ふ男――自分の顔見る程の男、は何人でも思付くものゝ樣な氣がして、男と云ふものいよ〳〵戀しくなり、稽古所から寄席、寄席から芝居と人集の多い所を好み、上の巻にも一寸寫した婆樣の家なぞにもそゝられるのを樂しみに出入する。十六七になりては、段々厭味に鰭がついて、人のよい翫弄物になるとは知らず、それを自慢の母親と富士本に出會た男の武田と云ふ名まで知りては其下宿屋の前、用もなきに徘徊して、よそながら顔見るばかりでは心ゆかず、どうしてあゝしてと工風の末のお霜をなづけて漸と昨夜の加留多遊びに其人の膝に肩に――爭ふはづみに振られた手にいよ〳〵心を空になし、たしなみの紅筆を鼻紙ににじらし、そんじよそこのたより聞たく、今朝もまだ十時にならぬ中か

ら、花簪一本にかなへてはしき戀――扨も果敢なき戀

さうね、武田さんは眞實にお優しい方ね……私もあんな優しい方が……何か私しの……私しの事を何とか云ッて入ッしやりやしなかッたの、え……武田さんが。

切角の鉛粉上氣して頬の色に消して、例の眼にお霜の顏を見詰る。お霜は今思出したかの樣に帯の間から、丁寧に疊んでも其人の手に觸れたしるしか、縮緬皺に却つて紅の色のなまめいた紙片を引出し、――

これを御覽なすッて……武田さんと新田さんとが大變に笑ッて居らッしやいましたよ

ね、これを御覽なすッて……。

おむらは其紙片ひッたくる樣に、見れは我から武田に送ッた文殼。ハッと口惜しく、眼尻人なみにキリヽとさせて、文殼口に喰さきながら――

これを見て……笑ッて……。お霜どん、何だッて笑ッたんだよ。え、え、これを……この私の……此文を見て……武田さんが何だッて……何だッて、何と云ッて笑ッてたよ、え、お霜どん。

お霜はわと下りに水口の板の間に半分足をかけ――

三十六

私は知りませんよ、何とおッしやッたか。たゞ何だか笑ッていらッしやッたばかりですよ。

おむらは喰さいてペッ〳〵と羽目に吐飛した、文殻の殘片を奥齒に喰しめ、ニチヤ〳〵と音をさせながら段々とお霜に詰寄る。

知らないッて、虚言をおつきよ。屹度私しの事を惡るく云ッたんだよ。何と云ッたよ。お前いはないかえ。云はなきやお返し、其花簪をお返し、返しとくれ。さア何と云ッたよ。

花簪返す事面白からねば、態と隱してやッたを打明る氣になりし――

あんな顔をして居て押がつよい、花風病だッ………

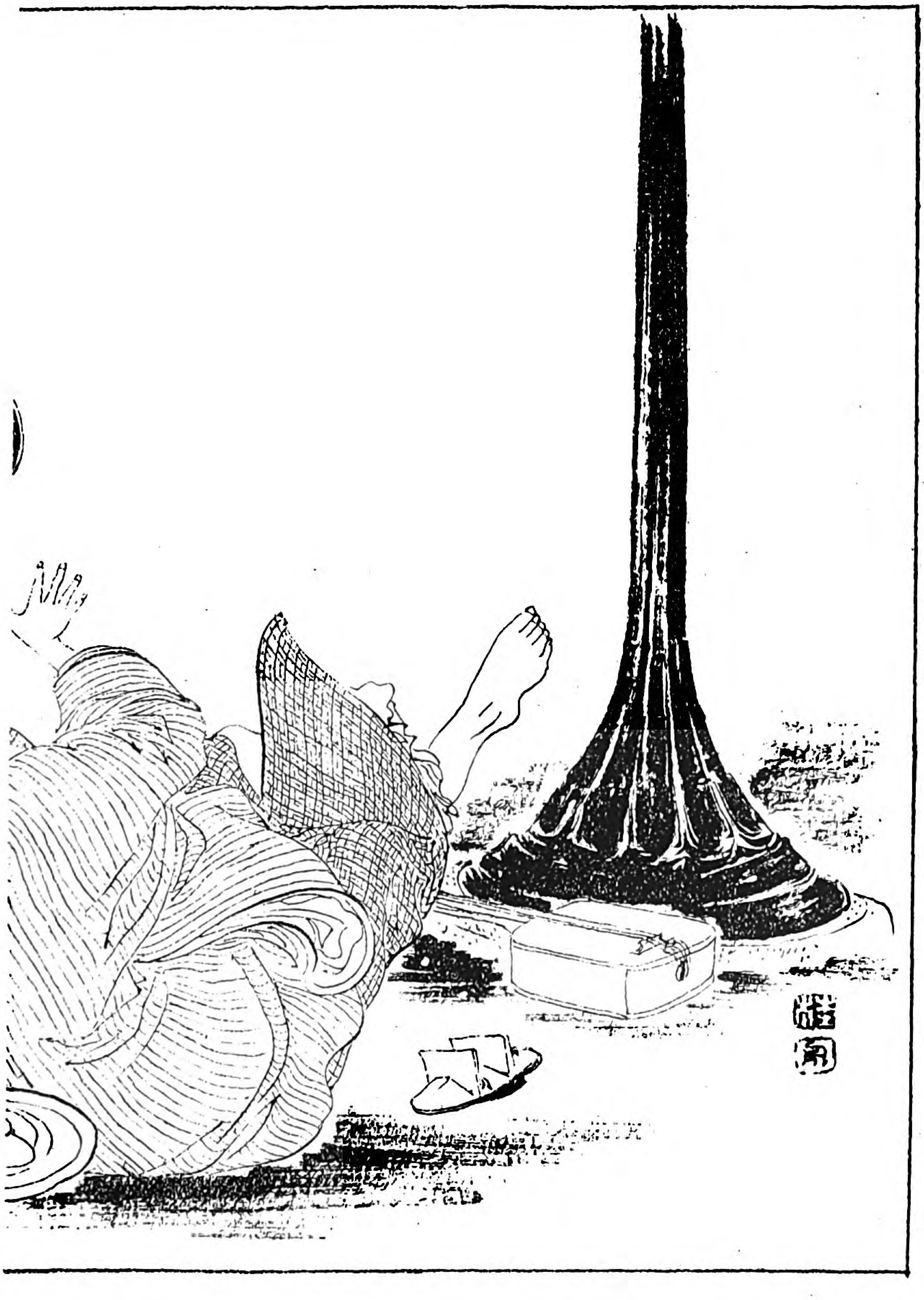
花風病!………ね丶、口惜しい。

お霜の頭にさした花簪微塵に摑み潰して、溝板に叩き付け、是れをまた下駄の齒に踏にじる

あら、簪を………おむらさん、何をするんです。

何をするッて、お前の知ッた事じやない。いらないお世話だ、花風病だッて。

お霜は今はッワッとなり、口惜しさを噛交た聲ふるへる。





ほんたうに花風病だよ。　花風病ーアい。

何だ、虱ッたかりめ。

花風病め。

虱ッたかり。

爭ふ聲奥に聞ねたか、此家の內儀を先きに、武田新田をはじめ四五人の書生、バラ〳〵と臺所に出て來るに、流石いくらか羞かしくなッたおむら、口惜しさうに武田の顔と睨みつけ、口小言いひながら足早に四五間駈出す後ろに、‖

アふヽヽ、オホヽヽ

笑聲見返つて、おむらは手拭の端喰さき――

あゝッ、口惜しい。　ざまァ見やがれ。

下谷の山伏町豊住町あたりは、申さば大阪の長町。ただ其地に入込んだ丈にて、龜岡町に似た厭な一種の悪臭が鼻をつく。住む程の者、五厘銅貨を頭にして其下の賣買に二六時の命を繋いで居る。其一二文の錢さへ、大道に顔をさらして借り兒に人の心を

佛にさせたり、破れ三味線におのれが昔しの無分別とうなつたり、一口にいへば自分の恥を看板にしての合力頼み。これらは眞地目にていくらか可愛らしけれど、其奥をさぐれば、强盗竊盗晝鳶共の隠れ家。一度此世に墮落れば、終世浮む瀬なく子々孫々乞食に生死して、金は貰うより外稼ぎ様のないものと思つて居るは――さても無慚の境界。

太陽も西に沈んで、夜と晝とのかわり目――人と人とのかわり目、晝の乞食ぞろ〳〵我家に歸れば、夜を持場の縁日まわりさそひ合ッて出かくる。今が此土地一番繁昌の時か織る樣な乞食の往來――夜行の百鬼玆に四散して、軈てまたシン〳〵と淋しくなる。

連れに後れて急歩か、一人の女乞食破れ三味線を抱へた半天の袖口海草の樣になり寒さうに着て居る一枚の袷、それも所々おッかぶせの「切れ」の色かわりて、裾はぼろ〳〵に裂けて脛もあらはに、冷飯草履に足袋もはかず、いぼしり卷の鬢はおどろになりて火がつきさう。顔は見よくもなき上に、額と鼻のあたりに膏藥を張りたれば、揩合ても其惡臭に胸が惡るし。

急ぎ行く女の跡をつけるは、俗に云ふ三尺帶のゴロッキ。曲り角の常夜燈の光りに女の顔を見た男は、いきなりに領筋引ッ攫みて、――

浮氣阿魔め。

女はアレーと一聲さけんで、苦しさうにもがく。折よく書生風の男二人通りかゝつて、見るより、――

何だ、新田、助けてやれ。

オイ來た。巡査を呼べ〳〵。

此救助にゴロツキは覺へず手を放せば、女は起上ッて書生の背後に隱れやうとして、一人と顔見合せ『おやッ』と顔を隱して一散に逃げ行く。ゴロツキは猶其後を慕ッて、二人とも影も見えなくなる。

何だ、今の女は。

見た樣な女だ……さうだ〳〵、山下のおむらだ。

え、おむら。去年だッたか、男をこしらへて逃走して、田舍で女郎になッて居ると聞いたが……驚いたなア。

實に驚いた。しかし、貴樣には惚れて居たんだから、あんなになつても、餘り惡くはあるまい。

馬鹿ッ。

ハヽヽヽヽ。

（をはり）



○内外百事便覽　中本一册四百九十九頁定價九十錢豫約定價六十五錢　發兌元報知社豫約申込所日本橋區大傳馬町文昌堂

報知社の井上寛一、枝元長辰、村井寛三氏の編輯に係る明治二十三年分の内外百事便覽は此の度愈々出版の運に至りたり。吾人は實に此の種の書籍の恩惠を蒙るものなり、其の便覽の名に背かざるを信ずるものなり。今之と批評せんとするに當り、校閲者矢野龍溪氏の序文を讀み大に意見を同ふするあるを見る。乃ち之を玆に掲げて評言に代へんと欲す。

事を調査するの必要起る毎に數十部の諸書を覽閲するは、人其の煩に堪えず是に於てか一書にして百事の覽閲に便なるもの生ず。西洋諸國に於いて年首に刊行する「アルマナック」「カレンダー」の類是れなり。毎年年首に之と刊行するや、人として購はざるはなく、戸として藏せざるはなし、此の書一部を坐右に備ふれば日常百事を覽閲するに於いて其の便言ふ可からざるものあればなり。然るに吾國に於いては未

此の類の書なきが故に、偶々取調ぶ可きことあるに當ッては、種々の書類に就きて之を求むるの煩を免れず、坐右常に數十部の書籍を具へ置かざるを得ざるの不便あり。況んや旅行等の節は一々是れ等の諸書を携帶し能はざるに於いてをや。然れども坐右常に幾十冊の書堆積するの不便は尙ほ之を忍ぶべし、其の事極めて必用にして而して其書なきに至りては不便實に忍ぶ可からず。例せば列國形勢の如き吾國人が事に付け折に觸れ之を覽閱するの必要最も多きものなるに、絕えて其の書あることと無し偶々三五年を隔て其の概略を譯出するもの有るも、二三年を經るときは書中の記する所總べて舊事に屬し、活世界の現狀を示すの用を失ふに至る。列國の形勢すら斯くの如し其の他の事柄また推知すべし。依ッて二三の知友に說きて此の書の刊行を謀り、又各々其の受持を定め編纂飜譯に從事せしめたりしに、今日幸にして其の初版を刊行するに至る。是に於いてか余は多年の不便を免るゝを得て、而して世人もまた其の便益を享くる者甚だ多かる可きを信ずるなり。唯恨む所の者は諸件の調査猶不完全にして、記敍の體裁亦頗る粗漏多きことを。然れども物其の始に於いて完備を望むべからざるは世事の通則なり。唯後來各年の刊行が次第に完全大成に趣くと期すべきのみ。

吾國に於いては未古今列國の事變を記敍せる精密の年表あることなし。偶々其の略を記する者あるも、十餘年前蘭書より翻譯せしものにて不十分の恨みなき能はず。故に本書にハ精密の年表を掲げんとて、編者等は專ら其の力を費したりしが、譯成るの後年表のみにて既に四百ページ餘に上れり。若し之を編入する時ハ本書の紙數多きに過ぎ、不都合と考ふるもの多きが故に、其の中より大事變の略表のみを掲ぐることゝ爲せり。

明治廿二年十二月廿五日　　龍溪居士識

○少年文武第一號

小本一册凡八十頁正價金八錢東京神田區駿河臺西紅梅町張弛館發行

此の天下の少年概して浮華に流れ、軟弱に趨き、日必ず眼鏡を要し、足必ず白足袋を穿つの時に當り、少年文武の發行ある蓋し偶然ならざるなり。少年文武は健筆の聞え高き中川重麗氏之が主筆となり、武を右に文を左に翼して、今日の文明少年をして千里に翱翔せしめんとするものなり。吾人其の第一號を見るに、徹頭徹尾維れ文維れ武燦然嚴然、また一筆の横槍を入る可きなし、實に文明の戰爭場裏に文武兼備の天晴御大將とならんとするものは之を讀まざる可らざるなり。但表紙の文字は流行の軟弱的塗抹的にして、本誌には極めて不適當なりと思はる。

○文明之法第一號　大本一冊十六頁定價金二錢五厘大阪東區作吉町文明社發行

文明之法は英に偏せず、獨に黨せず、佛に傾かず、平易に、丁寧に、優美に、以て文明の法を講述せんとするものなりと云ふ。果して然るや然らざるや、吾人は未だ其の第一號のみを看ず、故に又斷定するを得ず、然れども其の飽くまでも然らんことを冀望するなり。

○少女園第一號　大本一冊十八頁定價三錢大阪北區中之島香雨社發行

少女園は紅粧妙齡の紙筆、窈窕佳人の筆陣と肩書せり、而して又謹愼なる、正直なる、秩序なる、廉潔なる女子の手を以て成立つものなりと自白せり。吾人は其の果して紅粧妙齡窈窕の佳人達なるや、未だ拜謁の榮を得ざれば、固より之を知らず。而して又其の果して謹愼なる、正直なる、秩序なる、廉潔なる女子達なるや、其の文字と拜誦せしも未之を知るを得ず。兎に角勇氣勃々、鬚眉の男子を何のたいひもなく罵殺し去るの御手際、天晴御美事と感服するの外なし。



○木村長門守の妻其の夫に送る書

一樹のかげ、一河い流れ、是れ他生の緣と承はり候にこそ。そもれとゝせの比よりして偕老の枕をなして、たゞ影の形に添ふがごとく思ひまゐらせ、おもはれまゐらせ候。此のごろ承はり候へば、此の世限りの御催しのよし、蔭ながら嬉しくまゐらせ候。もろこしの項王とやらんは、世に猛き武士なれど虞氏のために名殘をおしみ、木曾義仲は松殿の局にわかれを歎くとやら。されば世に望み窮りたる妾が身にてハ、せめて御身御存生のうちに最後をいたし、死出の道とやらむにて奉待上候。必ず秀賴公多年海山の御鴻恩、御忘却なきやうねがひあげまゐらせ候。めで度かしく。

○一休和尚の母末期に一休に贈りたる書

われ等娑婆の緣盡き、無爲の都におもむき候。御身よき出家になりたまひ、佛性の見を磨き、其の眼より我等地獄に落つるか落ちざるか、不斷添ふか添はざるかを見たまうべし。釋迦達磨をも奴となしたまふほどの人に成りたまひ候はゞ、俗にても苦しからず候。佛四十餘年說法したまひ、終りに一字不說と定め上は、我と見我と語るが肝要に候。何事も莫妄想。あなかしこ

九月上旬　　不生不死身

千菊丸どのへ

かへすぐ。方便の說のみを守る人ハ、糞虫同じ事に候。八萬の諸聖敎をそらに讀みても、佛性の見を磨かずんば此の文ほどのことも解しがたし。

是れとても、かりそめならぬ、わかれては、かたみとも見よ、水莖の跡。

○しみの詞

此の頭文どもさらす中に、しみといふむしのおはかると、はらりすつるもさすかに覺へて、一心とめ、文見し人の、なきたまや、それもへばわかぬ、しみとなりけん」。一生文の中にて世をつくすも、いかなる契りにかと哀れなり。來世もし佛とやらんいふものになりそこなひたらば、それもこのものにはなりぬべくこそ。（睾白集）

○餘　興　　梅の舍おきな寄送

○下谷區の或寺の長老は、他の地面を我物として、賣却する約定を爲し、手金迄取込み素知らぬ顔で居りましたが、夫がとう〳〵發覺して、檀家の質屋さんも、米屋さんも、槇木屋さん魚屋さんも、悉皆まゐりまして種々相談の末、手金を取戻して示談になりました。してあんな坊主を寺へ置くと、ツマリ寺の破滅する基だと云ッて、とう〳〵其坊主を放逐したさうです。それで世間の噂、「成程詐僞から長老にはなれぬ。」

○先生鳥渡御聞き申したい事が厶います。ハヽア八公か、何だ。外の事でも厶いませんが、熊の野郎がメッポウケイナ大きな事を云ひますから。ヘイ何と云ッた。昔唐に先生のやうなエライ人があッて、其の子分とか弟子とかに、髮の四間あッた男があッて、そりや眞實で厶いますか。あッたとも〳〵。ヘイそんな大きな人を入れて置く家がありませうか。あるとも、千丈の家、百丈の家といふがある。ヘイさうしてそんな家を掃除するには、どんな物でしませう。それは箒千里といふがある。

○考物

1 筧竹碎而岩石崩、姜女未レ來孟子去、といふ句あり、之を直せば日用書生に缺く可からざる器具となるといふ、知らず何物ぞ。

2 雷雨晴不レ見ニ藥草一、といふ句あり、之を直せば食物の名となるといふ、知らず如何なるものぞ、

右二題　東京　橋本久想生出題

3 山霞、かすみは去れり、花吹雪、花は散りけり、雪も消えけり。（花の名一つの考）

右　大坂　琴水女史出題

4 井の下に橘あり、花は已に散りけり。（獸の名一つの考）

右　出雲　龜谷賢次郎君出題

右四題の考物を悉くお當てになッた御方には、例の通り本誌一部進上。

注意○考物を御送り下さるゝに、往々題のみにして答なきものあり、斯くの如きは大に編輯上差間あるに付、遺憾ながら沒書とすべし、爾後必らず同時に寄送あらんことを望む。

○考物の答案悉く當れば、本誌一部の賞あり、然るに出題者には毫も賞品なきものか、との疑問は諸氏より之有りたり。兎に角三題の新考物を送られたる者には、同じく本誌一部を呈すべし。但し本誌に掲載し得べき者に限る。

○出題にもせよ答案にもせよ、御寄送あらんとする時には、必らず楷書にて明瞭に讀み得る樣に認められたし。

○前々號の考物の答解答者六十三人、悉く御當てになつた御方四十九人。

(1) 老人が自から鬚を剪る事。　何となれば自ら鬚を剪るなれば鏡に向はざる可からず、自からの影折角鏡に映りても老眼にて辨じがたければ眼鏡をかけざる可からず。　それにて二重の眼で二重の鏡に向ふ事になる可し。

(2) 傘。

(3) 春日大明神。

(4) 上下。

彙報

○宮中御兼題

毎月宮中に於いて行はせらる、御歌會の御兼題は

○一月、月前雪。○二月、夜中梅、紀元節、齋中渉水。○三月、北條時宗。○四月、雨中花、○五月、加茂祭。○六月、里早苗。○七月、紫式部、○八月、尋野花。○九月、月前風。○十月、秋山、天長節、嶺松。○十一月、幼稚園。○十二月、霜夜鶴。

と承はりぬ。讀者諸君も試みに此の題もて、玉の聲金の響を詠み出でられては如何。

○梅花

梅花正に盛んなり、浦田艦非戸の邊、宛然たる白雲世界、茶屋の竈の烟また芳香を帶べるが如し。誰か此の境に遊び、此の花を觀て「氷千年之厚若兮、綴萬點之寒玉、節高杭而温雅兮、性貞固而潔白」を歌はざるものあらんや。　嗚呼此の花の冷艶と、香の馥郁とは固より一朝一夕にして得たるものにあらざるなり、世の青年子女思はざる可からず。

○日本の柿

昨年佛國巴黎府に於いて大博覽會開設の節、我國より出品したる柿の圖譜は、大に外人の喝采を博せしが、此の度伊太利國ミラン府のフラ、リインセキヨリー社より、右圖譜の送附を大日本農會へ求め來りしといふ。　夫れ千個の優品も、一個の劣品の爲めに其價値を失ふ、柿の圖譜に於いても撰びに撰びて其の注文に應せられんことを、吾人は大日本農會に望まざるを得ず。

○日本人試刑に處せられんとす

神奈川縣人澁谷重藏なる者は、米國某汽船に雇はれ服役中、昨年十一月米國ニューヨーク府の下宿屋にて酩酊の上、同船乘込水夫村上某と爭闘の末、遂に某を殺害せしより、十二月五日同國中罪裁判所に於いて死刑の宣告を受けしが、當時電氣死刑の議論盛んなる折なれは、試驗の爲め重藏の死刑執行を來二月十六日に延期する事となせり。而も日本人の同胞中にて、外國の電氣死刑の第一番に處せらるゝは、傍觀するに忍びざる事なりとて、同府在留の本邦人は目下奔走盡力中なりとか。　吾人は再び繰返して言ふ、千個の優品も一個の劣品の爲めに其の價値を失はんと。噫。

○細民藁を食ふ

斯くの如きも尚太平の象ありといふ乎、越中國邊にては昨年の不作の爲め、藁を喰ふの細民ありと。嗚呼斯くの如きも尚太平の象ありといふ乎。

○百廿圓の名刺

一方に於いては藁を喰ふの細民あり、一方に於いては百枚百廿圓の名刺を作るの殿樣あり、我邦の富も隨分懸絶する所ありと謂はざる可からず。聞く所に依れば華族前田侯には、此程一枚壹圓廿錢の名刺を某活版所に注文せられしとか。嗚呼此の名刺五枚の直は、以て能く一家三口の細民をして、一ヶ月間

藥を喰はせざるに足り、白枚の直は以て能く一ヶ年餘も米を喫せしむると得ん。誰か謂ふ、世が世ならば北國隨一の大諸侯なりと、百二十萬石の殿様なりと。

○象箸を造る必ず玉杯を造らん

表面に現はれたる百二十圓の名刺、決して奢りの沙汰と謂ふ可からず、「日本」記者の所謂象牙の箸でなければ掛らぬ話は、いくらともなく裏面には之有るなり。昔紂王象箸を造る、箕子嘆じて曰く既に象箸を造る必ず玉杯を造らんと。取除けの話は暫く置き、日本の富の度は實に消費の高と能く平衡し居るや否や。吾人は一たび之を思ふ毎に三嘆せずんばあらざるなり。象箸に於いて倘は膳玉を潰ぶしたる箕子をして、我現社會を見せしめば果して之を何とか謂ふ可きぞ。借問す、カメチ烟草一日の燃え高は如何。

○文學界の混雜

暫く此の文學界を退去りし者あり、退去らんとする者あり、新に又た進入らんとするものあり、進入りし者あり、其の混雜も亦甚しい哉。聞く所に依れば矢野龍溪氏の如きも、現時の小説家が滔々として魔界に墜落せるを慨して、新たに居城を文學界に搆へんとすと。吾人は既に氏が技倆は經國美談に於て之を見たり、彼の筆鋒に又幾何の鋭利を加ふるにもせよ、從來の各一方に於て旗を押立てつゝある軍師たちが、無雜作にもスパルタのピロピダス、エパミノンダスに於けるが如くならざらんことを知るなり。

○嗚呼村上英俊先生逝く

吾人は辻佛學會長の朗讀されし弔詞を掲げて止まん、涙潸々筆を執るを得ざればなり。

維時明治廿三年一月十日、佛學會名譽會員村上英俊先生逝く、嗚呼哀い哉。先生は元と信州松代藩士にして、德高く識博し、嘗て佐久間象山先生と相語り、佛蘭西學を修む、時已く穎悟の名を博せり。安政年中幕府の開成所教授方及外國翻譯方に任ず、又私學を開き門下有爲の人物を輩出せしめたり。明治十五年東京學士會院の會員に選ばれ、又我が佛學會の名譽會員となり、終始學藝を以て世に裨益を與へたること尠なからず。殊に先生の始めて佛蘭西學に志ざせしは嘉永元年にして、當時斯學未だ本邦に行はれず、事創始に屬すれば、固より學ふに良師なく、問ふに益友なく、僅かに字書に就き、獨力研究し千辛萬苦、以て其堂に上れりと云ふ。其の忍耐と刻苦は實に敬服するに餘りあり。其の著述に三語便覽、五方通語、佛蘭西詞林、佛語明案あり、譯述に西洋史記等あり、皆世に行はれ、當時斯學の指針たり。就中佛語明要ハ大部の字書にして、實に佛和對譯の嚆矢とす。此書の編輯に前後十年餘を費したりと云ふ、其の勤勞想ふべし。世人先生を稱して本邦佛蘭西學の始祖といふ、亦宜べならずや。曩に佛國政府より其の佛蘭西學に於ける功勞を賞して、シユワリエドロルドルナシヨナルドラレジヨンドンヌールの勳章を贈與され、今又我朝廷は其の教育上に於ける功績を賞し、特旨を以て祭粢料金三百圓を下賜せら

る。其の光榮誰か之を欽慕せざらんや。先生今や然として逝く矣、本邦文學の爲めに、又我が佛學者の爲めに、寔に痛惜に堪へざるなり。然りと雖も先生既に壽八十歲に達し、世に不朽の功績を垂る、亦自ら慰むる所あるべし。聊か所感を記して弔詞とす。嗚呼哀哉。

明治二十三年一月十四日　佛學會長從四位勳三等　辻新次

〇嗚呼新島襄先生逝く

嚮きに村上先生逝き、今又新島先生逝く、嗚呼今年は如何なる年ぞ、今春は如何なる春ぞ、咲き亂れたる梅の花は實に二先生の靈前に供せられたるが如く、囀りつゝくる鶯の聲は、二先生の亡魂を慰めんとするに似たり。吾人の新島先生に於ける徹頭徹尾其の意見を賛するを得ざるものあるなり、其の趣義を奉ずる能はざるものあるなり。然りと雖も吾人は飽くまでも先生の偉人たるを知る、先生の千辛萬苦、偉業を創せられたるを知る、先生の東奔西走、偉業を仕遂げられたるを知る、先生の百方經營、益々偉業を擴張せられんとしたるを知る、實に千古多く見ざるの創業者なり、守成者なり、勉強者なるを知る。それ之を知る、故に其長逝せられしを聞き之を悲む切なり。嗚呼同志社大學將に成らんと先生無し、哀いかな。

〇七十二日間の世界周遊

米國紐育「ウヲルド」新聞社より、七十二日間世界周遊の目的を以て出發したるチリー、ブライ嬢は、今年廿二歲の妙齡なるが既に地球面の過半を掠め去り、本月三日橫濱に來れり。來りしかと思へば、七日には既に去れり。三日間の暫見何の得し所ある、七十二日間の周遊何の見る所ある。然れども國に歸れば乃ち曰はん、妾は世界の周遊を仕遂げたる者なり、萬國の形勢を實見したる者なりと。一隅に三日ばかり逗留して、日本の實況は云々なりと口頭に上せらるゝも片腹痛きことにてぞ。されど我邦に於いてもブライ嬢の如きもの無きにしもあらざる可ければ、一概に嬢をのみ笑ふ可からず、罵る可からず、怒る可からず。

〇廢妾論起る、廢藝妓論も起る

廢娼論と與に廢妾論起り來れり、廢藝妓論も起り來れり。然りと雖も藝妓は醜業と斷ず可からず、妾なる者は之無きものなり。（其に正面に於いては）故に之を廢せんとするものも內部より之を廢せざる可からず、乃ち社會矯風の徒の專ら從事す可き事なり。而して社會矯風の要務は、社會の風儀を嚴肅ならしむるにあるなり、社會の風儀を嚴肅ならしめんとするには、先づ姦淫の公許を打破せざる可からざるなり。故にツマル所第一着は娼妓を廢するに在り。

〇廢娼論益々盛なり

喜ぶ可し　廢娼論は益々盛なり、其の廢妾論も廢藝妓論も實に廢娼論に因して出で來りたるものなり。殊に又此頃は一種の快論―逐妓論なるものの勃起せり、論の主旨とする所は、藝妓分限の者が、諸良民と軒を接して住居するは、如何にも無憫なれば、速に片隅に退去せしめんとするものなり。之れ甚だ良計なり速に實行したし。

〇知事と藝妓

一方に於いて藝妓を放逐せんとするものあれば、又一方に於いては藝妓をして知事の名代たらしめんとせり。奈良縣の有志者ハ稅所舊知事を送るの別宴

に於いて、知事在わさずとて其の平生愛顧したまひしといふ、藝妓若駒なる者を名代として、強て上座に押進めて、別辭を述べたる由、女學雜誌に見えたるが、果して信なるか。「行人獨抱無窮恨、斜日殘雲杜宇啼。」

（一月廿八日稿）

○稟告

讃岐、安達三郎君、本誌發送 三日。十八日の定日を違へざる事、野鄙なる小説を掲げざる事、考物の問題は成る可く鮮明にする事、等よ就き再度も御勸告被下難有奉謝候、爾後必ず注意可致候。○伊勢、夕山人君。本誌紙面の体裁（寄贈的）よ就き、嚴しく御高見御申越下され御厚情奉謝候、可成貴論に可從候。○芝、敬學生君。本誌第十六號の附錄に就き、御高評御送り被下忝に御禮申上候、紙上にも掲載可致ふれ共、或人よ干犯する所あるを以て、遺憾ながら見合せ申候、此儀不惡御思召下され度候。○志摩、中川悠松君。面白き考物三題御寄送被下御禮申上候、併去第一第三は餘り六ケ敷、解答者有之間敷推察仕候間、第一のみ掲ぐる樣可致候、不悪御了承下され度候。○大阪、琴水女史君。毎々面白きもの御寄送下され難有候、併去此度御寄送よ相成候二題の考物の中、第二の方は餘り六ケ敷矢張解答者なかるへしと存じ候間、遺憾ながら第一のみ掲載可致候、何卒御承知被下度候。○牛込、齋藤卯之吉君。新奇なる考物二題此か面白く候が、第一の方は是亦あまり六ケ敷候間、第二の方のみ掲ぐる事に可致、不悪御思召被下度候。○土佐、山崎雅子君。御寄送下され候新たな物、如何にも御丁想、且た面白く有之候へども、前號氏の考の如く六ケ敷候間、掲載見合せ申上茲に御好意を奉謝候。○安り、K、O君。號內侍の記事、難有受納仕候、文章如何にも流麗、掲載致し度きハ山々なれども、社員衛識櫻主人の號內侍傳も有之候へば、重複すへきを恐れ掲載見合せ申候、此段御推恕下され度、尚みしきしの御寄送下さるゝ樣願上候。○兒玉、流山正男君。御寄送下され候考物、如何にも面白きまなれども、答案御添へ下されざるより、弊社の內規に循ひ掲載致し難く候間、何卒答案御送附下され度候。○宮城、吉田鉄次郎君。新奇なる考物御送附下され拜見致し候處、如何にも御奇想ご感服仕候、併し餘り六ケ敷樣思へれ候間掲載見合せ申候、不惡思召下れ度候。○東京、木石居士君。君より前に御寄送よ相成りたる、傑作朝宮第十六號よ掲載致し候處澤山誤字脫字等ありたる趣、如何にも申譯無之候、若去原稿御手に殘り居り候ハヽ、再び御寄送下され度、又々紙上に掲げ、充分正誤可致候。

寄書

○初春探梅　　東京　樋口貞橘

梓弓、春は來にけり、鶴の音は長閑なりけり、天津そら、とよさかのぼる、朝日かげ、海原とほく、うら〳〵と、かすみそめつゝ、初若菜も、え出でそむる、山澤の澤邊にむれぬ、乙女子が、袖ふることに、にほひくる、匂ひもゆかし、初花の、梅はいづことたより來てとへばうれしく、鶯の、千代の初音を、きくのみか、我まちがほに、ほゝゑみて咲きたる梅を、見るまゝに、薫れる梅を、見るまゝに、いやなつかしみ、いつしかも 日はくれゆけど、朧めく、月は出づれど、かへるさの、をしくもあるか、梅の下かげ。

反歌

たづねきし、かひはありけり、梅の花、
　われまちがほ、ゑにほんたにかげ。

○初春風　　大阪　琴水女史

草も木も、めぐみあまねきあらたまに、
なびきそめぬる、かぜののどけさ。

〇初春殘雪
降りつもる、去年のかたみと、殘るゆき、
はるたつけふの、かせやとくらん。

〇定家卿雨中之吟　　大阪　琴水女史

雨中之吟とは定家卿の作られた十七首の歌の總名で、歌學十書の首位をも占め、歌學者にとりては非常に尊きものださうです。或說に此の十七首は定家卿が、雨中に吟詠されたものだといふのは誤謬で、これは別名を雨聲晴明と名づけられた事もあった位、兎に角後世歌を詠ずるもの、警戒までに詠まれしもので假令十七首悉く雨の歌の様に出來て居るにもせよ、決して雨中の作ではないものです。世には聽雨とて題を構へてまで之を樂む人の有るにもせよ　雨は陰氣なもので霖雨の折などは殊にもの憂く覺ゆるものです。全じく雪の朝、月の夕と樂を待つ人でも、大抵雨は人の嫌ふものとされる、其の風体の惡しき雨を題として、後の世に訓を遺されたのです。

元來今でも昔でも歌を詠ずる人の、古き、高尙な、幽玄な心のすが〳〵しき、文深きを好まず、唯珍らしき、奇な事を並べやうとするが常です。が、それは甚間違った事で歌の主意は決して奇や珍を求めるのではなく、唯有の儘に其の心ばへを云ふのです。それゆゑその奇を求め、珍を尊ぶ人等の警戒と詠みつくられたのですが、また可笑しいのは、其の十七首が矢張奇で珍な事です。成程鳥渡そのまゝ讀み下せば、如何にも悉く名吟の様ですが、深く考へれば皆瑕疵が有ります。今其の十七首を左に掲げ、其の瑕疵を一々申して見ませう。しかし歌學とて能くも知らぬ私、委しいことはとても出來ません。

偖亦何故に此の雨中吟を十七首造られしか、是れは聖德太子の憲法の條數に倚ったとの事。が、それもあまり信ぜられぬ話です。

分りもせじ、尋ねもいらじ、今霄など、生田の小野の、木枯の風。

此の歌申すまでもなく幽玄の體とはいはれません。上の五文字、生田の小野のといふも、何とやら理が聞えぬ様です、唯木枯の字で秋が分ったばかり。

またれ行く、光もおろき、月よりも、雨に聞ゆる、萩の音かな。

上の句下の句、意が通じて居ません。元來月を趣意の歌ですか、萩ですか、雨ですか、一向に分りません。且萩の花は風で詠むべきもので、雨に添ひて詠むべきものではありません。

打しめり、海のうれは、重りつゝ、西吹く風に、なびくむらさめ。

此の歌前と同じ様です、抑も西の風は暴きもので、東風こそ菅公の梅の歌などの様に能く詠んだものもあります。上句は海のうれは重りつゝなど、靜々しき淋しき体を、下句西風の急なるで暴く受ました、これも難です。

秋は行く、雨はしづくに、降りしきて、袖のしぐるゝ、夕暮の空。

秋は行く此の五文字首位に有るべき句でもない様です。理由もなく、唯雨に袖のしぐるとは可笑しい様です。

幾里の、雲に心も、通ふらん、うかふとかこつ、月は雨

にて。

此の歌前と仝じ様です、五文字の首位一向關係がありません、下の句も一向にわかりません。

夢くらま、知らぬ外山の、鹿の聲、さむる枕の、雨にたぐひて。

初にはゆめと有るにもせよ、外山の鹿の聲さむるとは解りません。

暮の秋、檐したゝる、夜の雨、くさの庵の、うちならねども。

これは實に辭の足らぬ句で、前後不相應、風体最も惡しきものです。

をやみせず、雨夜の空に、泣く涙、もりぬしはりぬ、せく方もなし。

これ亦前と同様、空に泣く涙とはどんなものですか、一首の意味更に分りません。

星もなく、雲間もしらぬ、雨の夜に、猶またるゝは、山の端の空。

是れまた其の意が解りません、山の端の空とは月をまつのですか、または何の意味ですか、實に風體の極めて拙きものです。

つれ〴〵と、山路露けき、秋風に、日影一ッに、通ふ春かな。

秋を春に詠んだのですか、春を秋に讀んだのですか、其れは常の事、此の歌はさうでなく、上句秋風に下句春日影、何意更に解りません。山路つゆけきは旅心の様で、そしてつれ〴〵と云ふ、これら眞に雨聲暗明の體です。

小更枯れし、奈良の木の葉に、風吹きて、星出る空の、薄雲のかげ。

さよ暮れぬとは更に惡しゝ、木の葉に風吹きて、是れでは景物の様です。

たへてこそ、山の深は、眺めつれ、秋にわびぬる、長き夜の霜。

忍ぶ心を讀んだ歌ですか、山里の跡ですか、其のいはれ深く、推量せねば解りません。

峰の雲、ふもとの霧に、色くれて、空も心も、秋の松風。

上の句も少しく嫌な句ですが、兎に角秋の松風とは一向に働きのない様です。

秋ならず、物をおもはぬ、空にても、契りよしなき、夕暮の鐘。

上の句の卑しさ下の句の優さしさに相當しません、唯落附かぬ作です。が、雨中吟としては中々の上出來です。

訪はぬうし、忘れぬかなし、鐘の音に、たのめもなれぬ、明方のゆめ。

詞つゞき最も惡しゝ、落附き最も宜しからぬ作です。

忘れぬらん、うらめしと思ひ、思ふとも、待つべきに非ず、とれんともいはじ。

字數四つ餘りて最も讀み惡し、世に稱する任明の月の歌あれば格別、斯う字數多くては惡くはありませんか。

家は唯、またうたゝねの、袖ながら、枕も白き、軒のひまく。

夏の短夜の様にもあり、戀の待宵の樣にもあり、殊に五文字態に作ッた樣に聞えます、兎に角無分別な歌です。

畢竟斯くは申しますものゝ、其の句は一首々々隨分意味も通じて居ます。が、それはたゞ大家の作と思ッて想像で讀むからの事で、平心虚意で考へて見れば、定家卿ともいふ大家が、斯かる奇なる歌を跡せられた事を嘆かねばなりません。

文明之母合本 第壹

定價上製五十五錢　並製五十錢

自第壹號至第六號　紙數凡四百頁　全國無遞送料

第一目次

社說　號數

○文明之母發行の旨趣…………一、
○女子敎育に關する吾人の主義…………二、
○スペンサー氏女權說の評論…………二、三、五、七、
○寧ろ繻絆を縫はん…………三、
○明治廿一年を送り廿二年を迎ふ…………四、
○女流小說家に望む…………六、

論說

○文明の母に父たる…………中邨秋香　一、
○べきものは誰ぞ
○家政敎育論…………中川重麗　一、二、
○女子諸君に注意す…………三刀谷扶網　三、
○作文につきての心得…………中邨秋香　三、
○賢兒を生ずる法…………菅了法　四、
○露國婦人の活動…………ゼブリコッフ　四、
○女子精神的敎育論…………ハイゼ、ブルチル　五、
○繪畫博覽會論…………ハリソン　六、

家政

○家屋搆造法…………田村勝貞　一、二、
○不思儀の話…………SA生　一、二、三、四、五、
○處女處世の鑑…………鈍の風流士　四、
○產前產後の衛生法…………筑溪漁史　四、
○衛生育兒法…………關場不二彥　五、

文藝

○露二十首…………美妙齋主人　一、
○歌三首…………町原熙麿　二、
○細工歌…………藤原爲兼　二、三、
○十二ケ月の歌…………綾小路有長　三、
○歌八首…………佐々木弘綱　四、
○竹取翁物語講義…………琴條女史　四、五、六、
○秋之夜晒漫筆…………內田遠湖・鐵筆將軍合評　四、五、
○五色の歌…………中原熙麿　五、
○詠人道歌…………福羽美靜　六、

小說

○水仙花…………鐵筆將軍　一、二、三、四、五、六、
○劣夫傑女譚…………山縣悌三郎　一、二、三、
○越路の花…………鐵筆將軍　四、
○吉野川…………鳴立庵主人　五、
○刺客…………鐵筆將軍　五、六

批評

其他○女子敎育論一○交際論一○夏木立一○今世姬かゞみ一○都の花二○少年園二○やまと叢誌三○貴女之友三○いらつめ批評の批評三○谷間の姬百合一篇四○婦人及び家政四○谷間の姬百合二篇五○ぬれごろも五○美術園五○皇朝記事文粟六○群芳新譜六○晚春樂六○さかさま六

雜錄

○婦人服裝討議…………醉學士　一、
○普國の皇后ルイサの話…………渡邊修二郎　四、
○拿破崙の皇后…………管野豊　五、
○忠勇の少女…………蠡湖漁史　五、六、

○折焚柴の記につきて……衒遠樓主人 六、
○操を美風に盡してよ……雲通路太夫 六、
○和歌の和の字……近藤芳樹 六、
其他○マリアユーサベッスの話三○大内常姫の話三○松村紹巴の頓才及び明智光秀連歌三○アルバーチ夫人の傳二○ウイットリアの傳二○兩美術の喫驚二○嫁と秋鵆子二○姓と氏との辨二○印度の女學士ラマバイ四○西洋の三世相四○北條氏康の文材六
寄書○數件
彙報○○數百件
挿畫○女生徒洋裝の圖三○才子佳人を救ふ圖二○寶祚萬歲の圖五○ジヨセフヒンの眞像六

文明之母合本 第貳

自第七號至第十二號 紙數凡五百頁

定價上製六十錢 並製五十五錢 全國無遞送料

第二目次

社説
○熱海の浴場……八、
○高等女學校と國の基……九、
○賄賂事件公判筆記を讀む……一〇、
○裸体蕎美人論……一三、

論説
○繪畫博覽會論……ハリソン 七、
○母の務……中川重麗 七、
○日本男子品行論……清水豊子 八、
○女子教育論……越智直 九、
○紫式部と淸少納言……柳處隱士 九、
○室家教育と學校教育……フサルプス 一〇、
○日本女子品行論……雲外散士 一〇、
○日本貞婦烈女……在米國の因生 一〇、
○歌謠論……佐藤宗介 一一、一三、

家政
○衛生育兒法……關場不二彦 八、
○急病の手當……醫科大學卒業生 筑溪漁史 一一、

文藝
○竹取翁物語講義……琴條女史 七、八、九、一〇、一一、一三、
○詠史十二首……村上正雄 七、
○楠公三首……町原麟 七、
○雛の歌……若江薫子 七、
○I dream'd a dream of on old eove. W. Martin. 七、
○兩の記……白川樂翁 七、
○近詠十六首……佐々木光子 八、
○大宮公園に遊ぶ記……佐々木信綱 八、
○不思儀の再會……山陰樵夫 九、
○箱根の木賀に浴して……中郡秋香 九、
○熱海名勝のうち……中郡秋香 九、
○乙女子……關根正直 九、
○吉野の雪○千譜……下田歌子 九、
○月前落花……竹屋雅子 九、
○北窓瑣談……橘春暉 九、一〇、一一、
○はとゝきすの歌……佐々木信綱 一〇、
○親しき友の米國にゆくはなむけに……佐々木弘綱 一一、
○美鼎一樹に題す……内田遠湖 一一、
○雜の歌……山蔭樵夫 一三、
○日光に物する道にて……佐々木信綱 一三、

○花野見にゆきて……竹屋雅子 一三、
○四海大平記大納言局錄……二十一峯外史 一三、

小説

○水仙花……鐵筆將軍 八、九、一〇、
○劣夫傑女譚……山縣悌三郎 七、八、一〇、一三、
○吉野川……鳴立庵主人 七、一三、
○刺客……鐵筆將軍 九、
○でも叔女……鐵筆將軍 一二、一三、

批評

○皇朝記事文粹の批評を讀む……五溪山人 八、
○新著百種の掘出し物……鐵筆將軍 八、
○長歌改良論辨駁辨……佐々木弘綱 九、
○皇朝記事文粹批評を讀む……二十一峯外史 九、
○文明之母文藝の批評……柳園主人 九、
○唐松操……鐵筆將軍 九、
○日本文學の三絕……饗庭篁村 一〇、
○自著自笑……南翠外史 一〇、
○級長戸風端書……沼田順義 一三、
○日本韓文○ぉ八重七○新著百種の色懺悔七○學校家庭游戯全書七○國の基七○日本文學七○自笑粹誌七○殺人犯八○智識八○新增補浮世繪類考一〇○女子の務一二○文藝一二○三人孃一二○學藝問答叢誌一二○美人一二○小説文庫一二○小説叢三○北陸婦人教會雜誌三○色界の燈三

雜錄

○寶物取調に就ての所見……川田剛 七、九、

○ニルセットの來歷……鑫湖漁史 七、
○コルセットにつきて……雲通路太夫 七、
○佳人の爪と其性質……鈍の風流士 七、
○少年子記者に答ふ……鐵筆將軍 七、
○フォスカー婦人の傳……陵北女史 八、九、
○日本の美術……リハーチー 九、
○和泉式部と小式部……衛遠樓主人 一〇、
○赤染衛門の話……挿畫……衛遠樓主人 一一、
○女の名……本居豐穎 一一、
○子と思ふ以呂波歌……稻葉源鄰 一一、
○ダンシングと盆踊り……翠葉史 一一、
○嫉妬心毆押への妙法……天洲居士 一一、
○伊勢大輔の話……挿畫……衛遠樓主人 一三、
○批評せらるゝも難し七○お輕と團十郎七○婦人慈善會への忠告○餘興負けてあげな‖それでも‖新考物九‖桶屋の頓巧智一〇○ベルッ氏の女子敎育論一〇○吾黨の明法官一〇○これハしたり‖實は然らず‖一語眞に千金考物（懸賞）‖○芋と蓮‖うんにや‖新考物（懸賞）○婚姻の時の秋の字三○菅公の裝束三○人丸の裝束三○業平の裝束三
寄書○數件
彙報○數百件
挿畫○神功皇后御肖像七○紫式部源氏物語を草する圖八○清少納言捲簾の圖九○和泉式部小式部に敎ふる圖一〇○赤染衛門の圖一一○伊勢大輔の圖一三

龍溪矢野文雄先生閲、井上寛一、枝元長辰、村井寛君同編

每年一月刊行

内外 百事便覽

最上等洋裝美本總クロース金文字入
紙數五百頁余
正價金七拾五錢　郵送費金十錢
豫約廉價金六拾五錢　郵券一割增
申込期限　二月十五日
送金　郵便爲替（本局宛）又ハ通運便
送本　一月七日ヨリ
部數　二千部限

廿三年ノ新版出來致候大ハ海外萬國ノ形勢ヨリ小ハ國內日用ノ百事ニ至ル迄一書ニ網羅シ遺ス所ナキハ歐洲諸國ニ行ハル、「アルマナック」ト題スル書ニシテ此一書ヲ座右ニ備フレハ年中百事ヲ閲覽スルニ於テ其便言ベカラズ故ニ諸國ニ於テ每年年首ニ其刊行アルヤ人トシテ之ヲ購ハザルハナク戶トシテ之ヲ藏セザルハナシ百事便覽ハ即チ是レト類ヲ同クスルモノナリ矢野龍溪先生ノ註文ニテ昨年ノ始メ本書第一回ヲ出版セシニ果シテ好評ヲ博シ廣ク江湖ニ行ハレ本年ノ新板モ豫定ノ通リ此度發兌ノ運ヒトナレリ前版ニ比スレハ最モ正確ニ最モ新シキ事實ヲ撰ビ殊ニ全世界統計ノ部ニ著シキ改良ヲ加　紙數モ亦タ百頁餘ヲ增加セリ其事項件數ノ多キ事知ルベシ且ツ其定價モ前版ハ九十五錢ノ處新版ハ九十錢ニ引下ゲ尚ホ御便利ヲ相謀リ來ル二月十五日迄ニ申込アル愛讀諸君ニ限リ特別廉價ヲ以テ販賣可仕候間陸續御申込アランコトヲ冀望ス

發兌元　報知社

專賣所及豫約申込所　東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地　長島恭三郎

豫約申込所　●東京丸善●博聞社●敬業社●集成社●辻文●三友●吉川●大倉●林平●大坂松村●熊本長崎●山形五十嵐●福島菅開●名古屋川瀨●長野西澤●越後水原西村●埼玉長島●其他各府縣書林

（遞信省認可）
明治廿三年一月三日出版印刷

（東京々橋區弓町耕文社印行）